

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8202  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3210

# 洛友会創立50周年記念特別号

## 洛友会と共に50年

### そして母校未曾有の改革を迎える

洛友会会長 近藤 文治(昭18年卒)

洛友会が鳥養先生を会長として昭和27年に発足してから50年を経過した。昔は「人生僅か50年」と言う言葉がよく使われ、50年は人間の一生の尺度とされてきた。ところが日本人の平均寿命は2001年現在で、男性が78.01歳、女性が84.93歳となり、日本は男女共に世界一の長寿国になった。しかし50年という年月は、現在でも人間の社会における活動期(大学卒業から平均寿命まで)の長さに相当し、50周年は、過去半世紀の活動を総括し、これから先のあり方を考える大切な節目である。そう言う意味で、洛友会創立50周年記念会報の発刊に当たり、50年の歴史を振り返り、これからの洛友会のあり方を考えてみたい。

私(洛友会発足時に洛友会の幹事を勤めたのを皮切りに、今日に至るまで50年間を洛友会と共に過ごしてきた。幹事と言っても、初めは単に教室と洛友会との連絡役

でお手伝いに過ぎなかった。会長鳥養先生が応用科学研究所(以下応研と略称)の理事長でもあった関係で、洛友会の事務は応研で担当し、応研の常務理事だった山村忠行氏が洛友会の常任幹事を勤め、事務のキーマンとして、将来洛友会の会館を作ることを目標に積極的な運営に当たられた。山村氏の死後、山本茂雄氏が応研の常務理事に就任、自動的に洛友会の常任幹事を兼務された。ところが鳥養会長に続く松田・大谷両会長は応研の役員でなかったため、事務局の強化策として、不文律的に応研の常務理事及び理事長が洛友会の常任幹事(あるいは副会長)に任じ、会長を助けて洛友会の運営及び会務の処理に当たることになった。また当初の会館設立の構想は、その後、戦後のインフレと恒常的な貨幣価値の下落に押され、一定の蓄えを残したものの、会館建設の夢は果たされることなく、

いつの間にか消えてしまった。洛友会が創立30周年を迎えた昭和58年、応研の山本常務理事及び吉田理事長が相次いで逝去されるという不測の事態が発生し、凶らずも、私が応研の理事長になった。それに伴い、今まで教室との連絡役の幹事であった私は常任幹事となり、洛友会の実務の責任者として、会長松田長三郎先生を補佐して、洛友会の運営に深く関わるようになった。以後、平成10年、大谷泰之助会長の逝去に伴い会長に推戴されるまで、16年間一貫して常任幹事を勤め(副会長時代も常任幹事を兼務)、洛友会の舵取り役を果してきた。

常任幹事16年というのは、常任幹事の果たす役割を考えると、どう考えても長過ぎたと言わざるを得ない。その間、松田・大谷両会長が応研の役員でなかったため、洛友会運営の企画立案は実質的に私に任されていた。幸い本部で担当する事業は、発足当時から、名簿と会報の発行と会費の徴収だけで、同窓会活動は本部総会の開催も含めて支部に依存し、本部の役割は限られていた。そうは言っても、16年間の会務を預かり、総会に諮る議題の立案を担当し、私なりに色々なことを提案してきたことを考えると、あるいは私の個人色が強くなり過ぎたのではないかと恐れている。

こうして反省を踏まえて、私が会長になってから、常任幹事の制度を改め、幹事を教室関係者(現役並びに名誉教授)及びデルタ会代表と応研常務理事で構成し、これに会長が加わった幹事会で、洛友会運営の重要事項の立案を合議によって決定するようにしている。今後、これを正規の組織とするため、近く会則を改めることを考えている。

私が常任幹事として、本格的に洛友会に関わり始めたのは、上述したように、昭和58年で、私はあと任期を一年残した現役の教授だった。京大教授としての最後の一年の勤務、新米理事長としての応研運営の仕事、並びに洛友会の会務処理及び創立30周年記念事業の企画立案などが、一斉に私の双肩に掛かることになった。この時、

重責に喘ぐ私を支えて頂いたのが、昭和20年卒の山口春男氏と講習所昭和13年卒の竹村清氏のお二人であった。詳細は後述する。

私の洛友会に関する思い出は非常に多い。中でも母校の創立百周年記

念事業と洛友会の創立30周年記念事業の2つは、強く脳裏に焼き付いている。前者はつい先日のことであり、まだ思い出として語るには日が浅いし、それに洛友会報別冊として、平成11年1月、百周年記念事業実行委員会から詳細な報告書が刊行されているので、ここに言及する必要はないであろう。

後者は私の洛友会常任幹事としての初仕事であり、その一部である名簿発行事務の電算機化は、洛友会その後の運営に大きな貢献を果たしただけに、格別懐かしい思い出となっている。30周年記念事業には、他に記念誌の刊行があったが、これは前記の山口氏(山本応研常務理事の後任者)に担当をお願いした。一方、電算機化の事業は、記念誌の刊行に遅れてスタートしたが、電子工学科の田丸教授の指導を得て、竹村氏(山口常務理事の後任者)の担当とした。着手してから約1年後、お二人の努力によって、現在の洛友会の会員データの電算機処理が完成し、初めての名簿が昭和61年(?)に刊行された。その後名簿の内容は年々充実し、それに応じて、処理プログラムは計算機会社の手で度々変更されたが、会員データの

フォーマットは当初のままである。これは田丸教授の設計が如何に緻密であったかを物語るもので、記して感謝の意を表したい。なお電算機処理化に要した初期経費の詳細は記憶にないが、この時刊行した30周年記念誌の経費も含めて約300万円であった。全額を記念募金で賄うべく会員に募金をお願いしたが、計画がずさんで200万円位しか集まらず、不足分約100万円を洛友会の蓄えから補填して頂いた。しかしお陰で、現在の会務は昔に較べると大変楽になり、会員にとっても極めて親切な対応ができるようになった。名簿の発行だけでなく、会報についてもまた会費の徴収についても同様である。

最近、コンピュータだけでなく情報・通信技術が画期的な発達を遂げ、IT時代を迎えて世の中の構造さえ大きく変革しつつある。洛友会にあっても、東京・関西両支部でホームページが開設されたことに刺激され、かつ各支部幹事からの要望もあって、本部でも木村名誉教授の指導でEメールを開設し、各種の連絡に便利に使っている。ホームページの作成は、従事者の能力と本部の担当する業務の内容を考慮して、まだその時期ではないと判断し見送っている。しかしインターネットを通して、支部のホームページを時々拝見して、支部の情報を得ている。さらにIT時代の洛友会のあり方を種々模索している。例えば名簿

のCD-ROM化は現時点では経済的に不利であることが判ったが、ホームページを利用して会報を発信することは、案外近い将来実現できるのではないかと感触を得ている。

さて、いよいよ母校電気系教室の大学院専攻が、工学研究科のトップを切つて、今年度中には桂キヤンパスに移転し、さらに来年4月から、全国の国立大学が独立行政法人組織に切り替えられることになっていく。開びやく以来かつてない大規模な改革である。しかしこのような改革は今に始まった問題ではなく、既に10年余り前から、研究の活性化を目的に、従来の学部中心の構成から、大学院中心の組織に切り替えが始まったが、それと同じ路線上の改革である。しかしその進展が速く、現役の先生方でさえ、現段階では将来像が掴めないと言っておられる。とてつもない大変革である。

### 洛友会会員構成の変遷

木村 磐根 (昭30年卒)

一方、洛友会はこれに対応して、

洛友会では京都大学電気工学科の卒業生をベースとして始まったが、この50年の間に、電気工学科が発展的に改組され、洛友会会員構成も以下に示すような変化があった。すなわち、昭和32年(1957年)3月までは電気工学科(定員50名)の卒業生だけであり、卒業生数も50〜60名ほどであつ

どうすれば会員に喜ばれる組織として存続できるのか。ただでさえ、洛友会としては大学の変貌に伴い、会員の確保や会費納入率の低下に悩んできた。これらの問題は今後一層拍車が掛かることが予想される。しかし現時点では明確な解決策はない。ただ言えることは、母校と洛友会との距離をできるだけ詰めることである。上に述べたように、私が会長になってから、教室選出の幹事を中心に幹事会を構成し、洛友会の運営を合議制にしたのはこのためである。また会報の「教室便り」欄を増強したり、支部総会に会長だけでなく、現役教授の出席をお願いし、教室の現況と共に大学改革の報告をして頂いているのも、同じ趣旨に基づくものである。

どうか会員の皆様には、あらゆる機会を捉えて母校の改革に関心をお寄せ頂くようお願いして、洛友会創立50周年記念特集号のご挨拶と致します。

学科は同窓会を洛友会と別に創設された。昭和61年から入学定員の臨時増があり、電気系学科の総入学定員は昭和61年130名、62年145名、63年143名、平成元年130名、同3年140名とめまぐるしく変わっている。

平成7年(1995年)4月、工学部の23学科が学科統合により6学科に編成替えとなったが、電気系3学科も電気電子工学科(定員140名(内臨時増員10名))と1学科にまとまり(大学院では電気工学専攻、電子物性工学専攻、電子通信工学専攻の3専攻に改称された)、平成9年3月からは大学院博士前期課程では上記3専攻の修士生がでることとなり、学部では平成11年3月からは電気電子工学科の卒業生となった。なお平成11年からは臨時増員10名を文部省に返したので、正規の定員は130名となっている。

一方大学院に関しては、平成8年4月、工学研究科から独立してエネルギー科学研究科が設置され、また平成10年4月には情報学研究科が設置された。このとき、電気系の一部の教官はエネルギー科学専攻に、また電気系3専攻のうち、電子通信工学専攻が情報学研究科に移った。そのため電気電子工学科の卒業生の一部は上記の情報学研究科、エネルギー科学研究科の大学院に進学することになる。

洛友会会員の構成は、従って平成7年4月以降は大変複雑となっている。これを簡単にまとめると、これまでの工学部電気系3学科卒

業生、大学院工学研究科電気系3専攻修士生が基礎であったが、平成7年4月以降の入学者については工学部電気電子工学科の卒業生が基礎であり、他大学、他学科の卒業生であっても、情報誌「Cue」に一覧が記載されている。電気系関係研究室の大学院出身者を洛友会構成員とすることになっている。なおこのほか、電気系関係研究室の教員で、上記のどの分類にも属さない方々については役員会の承認を得て推薦会員となって頂いている。

### 洛友会本部および支部の予算作成方針の変更

木村 磐根 (昭30年卒)

洛友会本部の役割は、会員の方々から会費(本部会費と支部会費)を頂き、本部会費により会報を発行するとともに、隔年に名簿を発行することでありました。ただ、名簿の発行年には、この費用を若干援助して頂くためと支部活動の援助のために、支部で名簿掲載広告を集めていただいております。

一方、本部の名簿印刷費・郵送費を除く支出はほぼ毎年一定であります。会費納入率が年々減少しているため、本部で使える予算が年々減り、会報の発行回数を減らして対応せざるを得ないという事情があります。上記名簿広告と会費納入率との関係で、本部会計と支部会計の間に経理上に行き来が発生いたします。毎年本部総会

でその具体的な内容をご承認いただいております。経理上の行き来は一定のルールによっておりましたが、そのルールがわかり難いという支部からのご指摘もあり、ルールを単純明快化する方向で2001年度の予算作成時から、各支部のご了承を得て、本部の予算作成方針を左記のルールによって行うことになりました。

1. 本部の支出は名簿発行用を除外すると毎年ほぼ一定であるが、隔年に名簿を発行するため支出が2年周期で変動する。そこで予算計画を2年を一サイクルとして建てる。支出としては名簿関連を除いた定常的な本部活動費の過去2年分をBとする。

2. 本部収入は会員の年会費の取入が主なものであり、過去2年分の合計をAとする。上記AからBを引いた残額から名簿発行費用(印刷費と送料)を減じた額Cは赤字になるので、この赤字分を支部で集められる広告費から負担いただく。

3. なお支部は規模の大小があり、小さな規模の支部では広告収入が見込めないため、支部会費(会員一人1000円)だけでは支部活動が十分でない。そこで総広告費から各支部へ2年ごとに10万円の支部交付金(9支部で計90万円)でこれをDとする。を支出する。

4. 広告を集めることの可能な支部では、広告費からまず30万円の基礎控除を差し引いた額から、2項の名簿のための補填額Cと

支部交付金Dを一定の率(10%)20%で2年ごとに若干変動する)で分担いただき、その残りを支部活動費に使って頂く。

このルールの実施の結果、広告費から名簿発行費のために補填いたした額Cは2003年度予算では60万円弱(総広告費の6%程度)であり、またこの新方式により本部としては年4回の会報発行を継続することができるようになりました。なお本部としては、会報印刷費、名簿印刷費など、必要な経費をできるだけ少なくして努力を続けていきます。将来、会報をインターネットでお送りするか、名簿をCD-ROMでお送りすることが可能になれば、本部支出が画的に節約できますが、それまでは現状を続けて行くことに致します。会員諸氏には洛友会を引き続きご支援下さるようお願い致します。

洛友会本部幹事

洛友会京都大学電気百周年記念事業の経緯

木村 磐根(昭30年卒)

京都大学は明治30年(1897年)に設立されたが、当電気工学科教室はその翌年明治31年9月に創設された。従って平成10年(1998年)9月に電気工学科教室創設百周年を迎えることになり、平成8年初め、電気系教室としてそのための記念事業の準備を開始した。まず記念事業の内容を検討し、百周年記念誌の刊行、洛友会の法

人化、電気系教室の情報誌の発行、記念パーティの開催(平成10年9月)を骨子とし、まず平成8年2月3日の洛友会役員会、および5月25日の総会で記念事業計画の概要の紹介と、洛友会会員に対する募金依頼の必要性を説明し承認を得た。

その後、電気系教室および洛友会大谷泰之会長、近藤文治副会長、常任幹事とで引き続き検討を行い、洛友会事務局の法人化を考えると、会員からの募金だけでは無理であることから、卒業生を多数採用いただいている企業にも募金をお願いすることとした。一方洛友会事務局の法人化に関連して、文部省のアドバイスを仰いだ、同窓会の形態をもつ団体の法人化は認められないことがわかり、洛友会とは切り離して、電気系教室などへの教育的・研究、国際交流などへの恒常的な支援等をおこなう

目的の法人を設立することとして、募金目標額も3億円とした。平成9年(1997年)2月1日の洛友会役員会で再度記念事業計画を説明した。この事業の準備のために洛友会電気100周年記念事業実行委員会をつくることとし、洛友会顧問、会長、副会長、支部長、幹事(計19名)、電気系教室教授(17名)、企業で活躍中の卒業生の方々(約80名)に発起人をお願いした。また実行委員会委員(70名)および実行委員会幹事(11名)は上記発起人から選出することとした。なお発起人、実行

委員の依頼は1月末から開始し、2月20日を期限として承諾を得させていただいた。また実行委員会事務局を財団法人近畿發明センター内に置いた。一方、京都大学百周年記念事業の募金活動も別途進行していたことから、電気百周年の募金を少し遅らせ、各企業への趣意書の発送を7月に行った。

記念誌の編纂は電気系学科の松波弘之教授を委員長とする編集委員会で行われた(別稿参照)。また今後の継続事業として、産学協力を促進する主旨から、京都大学電気系関連研究室の研究動向を産業界に知って頂く電気系教室情報誌を定期的(年2回)に出版することが決められ、平成10年7月にその創刊号が発行された。情報誌の名称も「きつかけ」が「手がかり」の意味と京大電気系教室の英文略号「KUE」をもじった「Cue」と決められた。

同年9月26日記念式典、記念講演会、祝賀会が京都・都ホテルで開催された。参加者数は洛友会会員188名を含む470名あまりで、国立8大学電気系学科のご代表、関西大学の電気系学科ご代表など70名の方々、および18名の名誉教授に参加いただいた。

記念事業の募金活動は記念式典の日までに比較的順調に行われ、洛友会会員1508名から38,419,000円、企業17社から23,800,000円、賛助会費10社1,200,000円、祝賀会参加費3,270,000円

など計66,787,706円が集められた。ただ、経済不況が始まっていて、企業からの募金が予定した通りにはお願いできず、法人化のための基金の準備は到底無理となった。記念事業実行委員会幹事会としては、記念式典関連行事、記念誌発行等を終えた後の残額約400万円の使途について検討した。しかし、預金利息が殆ど期待できないことから、これを基金とすることはせず、電気系教室の情報誌「Cue」の発行を主な事業(賛助会員と、記念事業に協賛された洛友会会員に郵送配布)印刷郵送費と管理費で年間300万円弱の支出)として、予算の続く限り続けて行くことになった。

記念事業の経理に関しては毎年電気系教室の教授の一人に監査をお願いし、会計と経過の報告を洛友会報7月号に掲載してご承認を得ることとしている。

なおこの間、平成10年5月の洛友会本部総会で大谷泰之会長がご健康上の理由で洛友会会長を退任され、近藤文治副会長が会長に推戴された。従って記念事業実行委員会会長も近藤文治洛友会会長が引き継がれている。

なお記念事業の管理は、洛友会と別組織の記念事業実行委員会事務局(近畿地方發明センター内)で行っているが、実行委員会会長を近藤文治洛友会会長にお願いしており、幹事世話人も洛友会本部の木村磐根幹事が兼ねて担当していることもあり、洛友会本部活動

の一部として今回50周年記念号にこれまでの経過の概略をご報告する次第である。

記念事業実行委員会幹事代表  
(現在大阪工業大学情報科学部)

### 「電気教室百周年記念誌」 発刊の想い出

松波 弘之(昭37年卒)

1998年(平成10年)に京都大学電気工学創設100周年を迎えるに当たり、記念事業の一環として100周年記念誌の刊行が企画され、電気系教室に編集委員会が発足しました。その世話役を務めましたので、経緯や感想を述べさせていただきます。

委員会ではいろいろと議論した結果、内容は、100年を振り返り、「教室の歴史」、「現在の教室の状況」と「研究分野」を紹介するとともに、電気関連教室の卒業生に依頼して「電気・電子業界の技術展望と今後の予測」を盛り込むことになりました。名誉教授や教室教官に100周年を期して今後の教育や研究への提言も依頼することにしました。業界の技術展望については、編集委員会の判断で分野ならびに題目を設定し、卒業生の方々に限定して各分野での活躍状況を手分けして調査し、依頼しました。

また、広く卒業生の方々からの寄稿を期待して、ほぼ1年前から洛友会誌に4回にわたって寄稿を呼びかけるとともに、洛友会名簿

に記載の各学年の評議員の方々に、「学年の思い出」をまとめてもらうことをお願いしました。加えて、350人を越える方々に直接依頼の書簡を出して寄稿を依頼しました。その結果170人を越える方々から寄稿をいただきました。貴重な写真や資料もお送りいただきました。それらを、技術、社会の将来に関するもの、思い出に関するものに分類して、掲載しました。

寄稿には100年の歴史の中でそれぞれ貴重な一時代を担われた雰囲気がよく表れています。原稿は字数の大枠を決めてお願いしましたが、筆が弾まれた文はそのままとしてあります。校正は編集幹事が行い、用字用法(漢字や送りかな)も極力著者の原稿に従いました。なお、教室の歴史に関しては、京都帝国大学史(昭和18年12月)、京都大学工学部電気工学教室50年史(電気評論37巻、第3号、昭和24年9月号)、教室創設60年誌(洛友会報)、ならびに京都大学七十年史(昭和42年6月)、京都大学百年史(平成9年6月)を参考としてあります。

100年の経緯を踏まえて、電気関連分野における教育と研究、さらには斯界における今後の方向が垣間見えるものとなりました。編集に関与された教室内編集委員の方々17名に感謝の意を表します。

京都大学工学研究科  
電子物性工学専攻

## ●関西支部●

### 洛友会50周年の思い出

佐々木 正(昭13年卒)

洛友会も50周年を迎えると聞いて感慨一人の思いで一杯です。最近、企業・会等で50周年行爲が目につく。NHKも50周年といった具合。

日本では最近までは寿命が50年とか、それに対して実体の寿命は80年になろうとしているが先の裾野が伸びたといっても人生の頂上は50年が頂上のように思える。アメリカの調査をみても人生観には日米間で大きな違いがある。日本は一樣に60歳定年の単純な人生であるが、アメリカは50歳が第一人生のゴール、51歳から90歳位までが第二の人生、90歳から先に自然に消え去るといった考え方があるアメリカの方が合理的なように思える。そういうことを考えていると洛友会の50周年を聞いて、この辺を折り目に新しい会の発展を考えても良いのではないかと思う。

丁度大学自体も来年は特別法人になり、大分変わってくる。洛友会も生き方を変えなくてはならない様に考える。人間にも、孔子が論語で言っているように(この辺が老人臭いが)50歳は40歳代の「不惑」と50歳代の「天命を知る(知命)」の境、人間で言えば「天命」を、会では「使命」を知るという年では

なからうか。時はまさに大不況、丁度このあたりが折り目で新しい日本に生まれ変わらねばならないと思うと同時に、会も使命を考え直して新しい目標をつくらないといけないように思う。

来年から特別法人として母校自身が変わる。また、日本自身も内容が変わってくる。国の競争力からいっても今や韓国・台湾に出抜かれ中国にも追い抜かれていく状況。

順位も24、25からさらに下がっていく。かかる状況のとき、洛友会のごとく年代的にも幅広く、また同年代でも幅広い会というのはその存在価値は大きい。

年長者は年少者にその経験とノウハウを伝え同一年代でも異業種間の情報交換になっていわゆる「共創現象」による新境地の開拓ができるはず。時には会以外のベテランからその経験を聞くとか、また若い人たちの事業に応援参加をして発展に寄与するとか色々といふの性格から言って色々することが考えられるのではないだろうか。それが可能だと思ふ理由は次の事実に基づく。

(一) 大学は社会で一番大きな場である。それ故にその場で育った会の人たちはお互いに一番信頼できる人たちである。お互いの情報交換も多く交流され、それによる多くの創作が期待される。

故に、お互いの長所・利点がよくわかりシナジー効果はもとより考え方からも新しい事が創作される可能性を持つ。

(二) お互いに率直に気持ちを打ち明けられることができ、それが次第にお互いの感謝の気持ちになつて表われ、益々新しいことに打ち込むときに大きな力になつていく。

(三) 若い年代層は将来の後継者となつて育つていくし、延いては会の益々の発展につながる。以上考えてくるとこの際、会の目的といふか使命といふかを再検討し、50周年以後の更なる発展を考えてみてはどうだろうか。

アメリカのベンチャー企業が半分近くの社外重役を抱え、その社外重役が一度企業を引退した人の会(AARPの如き)から入つて若い人に先輩としての経験とノウハウを与え、若い人たちの企業運営に大きな力を与えているのを見るとき、つくづく日本にもこういう運営があつてもよいのではないかとと思う。

こういうことが年長者の寿命を延ばし生きがいを感じ、若年者にとつては大きな力を得て大きな夢も生まれてくるのではないだろうか。

50周年の節目に際し、老人の夢として新しい日本の生まれ変わりの一端として実現したいものだと考え続けています。

### 時代の変わり目

森井 清二(昭24年卒)

私が洛友会関西支部長を務めていたのは、平成3年(21世紀が始まる丁度10年前の1991年)6月から平成5年6月迄の2ヶ年である。今日、日本のバブル崩壊は平成2年から始まったと言われているが、当時大方の人は確かに株価は急落し、地価も下がってきているものの、これは一時的な調整局面で、ベストセラーになった渡辺昇一さんの「日はまだ昇る」に書かれているように、日本の技術力は底強いものを持つているので、少しの間我慢してれば、また、経済は上昇に転じると信じていた。現実はこちらと裏腹で、この時期から株価・地価共に一方的に下がり続け、今日ピーク時の四分の一、三分の一となり、産業の空洞化・IT不況も重なって、深刻なデフレから脱出する目途のたない閉塞の時代を迎えている。その予想が外れた原因の一つはこの時期に世界情勢が大転換したからである。平成3年から4年にかけて、それを象徴する大事件が立て続けに三つ起こっている。時系列的に言う、「湾岸戦争の勃発」「ソ連邦の崩壊」「地球サミットの開催」であるが、影響の大きさを言えば先ず第一にソ連邦の崩壊を取り上げねばならない。ソ連邦保守派のクーデター失敗から始まって、ゴルバチョフを救出したエリツェンが台頭し、ソ連共産党は

解体、バルト3国が独立した。これを契機に既に始まっていた東欧諸国の脱共産化に拍車がかかると共に、中央アジアの諸国も相繼いで独立し始めた。また、中国にも多大のインパクトを与える事となった。中国は天安門事件以来一時鄧小平に対する批判が強まり、改革開放路線も足踏み状態にあったが、ソ連邦の解体によって唯一の社会主義大国として孤立感を深めた所へ、後述する湾岸戦争での圧倒的な米軍軍力に衝撃を受けた鄧小平の反撃が奏功して、平成4年10月の第14回党大会に於て「社会主義市場経済の確立」「改革開放の加速」「科学技術の振興」等を柱とする方針が固まった。その結果、世界の自由経済市場の規模が一挙に倍増し、極言すればそれ迄資本主義と社会主義の二つの陣営に分かれ、一物二価でないにしても、一物多価でバランスしていた時代から全世界が一物一価の時代に変わった事になる。次に湾岸戦争についてであるが、現在のイランは英国が第一次世界大戦の戦後処理として、オスマントルコを解体して作った国であるとは言えその根は深い。民族宗教の対立の上に世界のエネルギー源が石油に依存する様になってから、英、佛、露等諸国の利権がからまり、その時々々の利害により昨日の敵は今日の友となる複雑な様相を呈し、我々には簡単に理解出来ない地域の出来事である。しかし、この戦争で素人眼にもはっきり判つ

た事が二つある。一つは米国が世界で唯一、地球上の如何なる地域の紛争にも介入し得る軍事力を持っていると言う事であり、もう一つはハイテク戦争と言う全く新しい戦争様式が出現した事である。第二次世界大戦に於て大艦巨砲の時代から航空機の時代に移り、核兵器の出現によって戦争様式が一変したが、湾岸戦争に於ては空が宇宙に拡がり、スパイ衛星を含む探査能力と誘導兵器の精度が勝敗を左右する時代となった。

地球サミットは1972年に開かれた国連レベルでの最初の国際会議「ストックホルム国連人間環境会議」の20周年の節目として、リオデジャネイロで世界176ヶ国・機関が参加して開かれた20世紀最大の国際会議である。「環境と開発に関する国際会議」と銘うたれ、持続可能な開発を基本理念とする「リオ宣言」、これを実行に移す行動計画「アジェンダ21」並びに「森林原則」が採択され、「気候変動枠組条約」「生物多様性条約」が署名された。その後の進捗状況を見ていると各国共総論賛成、各論反対の様なケースが多く、前途多難であるが、少なくともこの時以降世界中で政治であれ、経済であれ、あらゆる交渉事が地球環境問題抜きでは語れなくなったのである。

話を変わるが、洛友会の歴史にも大きな変化があった。平成3年2月、鳥飼先生の後を継いで16年の長きに渡り洛友会会長の務め、会の発展と後輩の指導に御尽力頂いた松田先生が御逝去された。先生の闊達な御人柄と先見性、学問に対する情熱は同窓生一同の人生の鏡であり、正に巨星落つた感を深くした。後任は洛友会創立以来、幹事と副会長を務め会長を補佐してこられた大谷先生以外に無かったが、先生は先輩諸氏もおられるのにと遠慮され、会長代行と言う形で御引受け頂いた。平成3年度の総会は大谷先生が副会長の儘会長代行として主催されたが、この席で長年副会長を担務して頂いていた長老の方々が全員顧問に就任されたので、副会長は大谷先生以下4名となった。平成4年度の総会で大谷先生が正式に会長に御就任されたが、この間副会長が御一人亡くなられ副会長は近藤・卯本両先生の御二人のみとなり、補強が是非必要となった。その結果、平成5年度の総会に於て大谷会長、近藤、卯本、大島、池上副会長と言う新執行体制が誕生したのである。

関西支部に於いても役員任期の変更があった。支部役員任期は各地域の事情でマチマチであったが、関西支部の場合、本部総会が関東・関西と毎年交替で実施され隔年合同総会となる為2年が妥当とされていた様である。然し東京支部も1年であるのと、支部長を2年務めるのは会社としても重荷であるとの意見もあって、近藤副会長・大島前任支部長・藤島次年度支部長と相談の結果、平成5年度藤島支部長の時から役員任期が1年に改定された。最後に私事になって恐縮であるが、昭和60年頃、全国九つしかない電力会社の社長ポストを四つ迄洛友会メンバーで占めたことがあった。北陸電力の森本社長、中国電力の松谷社長、四国電力の平井社長、関西電力の私の4名である。その後夫々後進に道をゆずられ、最後に私が辞任したのが平成3年の12月である。この4名で4電力洛友会を作り、毎年1回夫婦同伴2泊3日で各地域の名所旧跡を順番に尋ね交流を深めていたが、昭和60年に北陸から始めて4巡目関西で幕を閉じた。

メンバーの一人で長年中国支部長を務められた松谷さんは昨年10月永眠された。

### 洛友会関西支部長時代の思い出

宮本 一(昭31年卒)

今年洛友会発足以来50周年を迎えました。京都大学電気工学教室創立百周年の内その半分を連綿と続けていられるのは、会員皆様の協力のみならず関係者各位の並々ならぬ御努力の賜物と、心から敬意と感謝の意を表すものであります。

日新電機の安井社長からバトンをお受けして私が関西支部長を仰せつかったのが電気教室百周年の次の年に当たる平成11年の一年間

でした。

総務幹事の45年卒の田中宏毅君、会計幹事の54年卒の乾俊一君をはじめ各幹事の諸君の協力を得て

(1) 少しでも楽しめる魅力のある関西支部にしよう  
(2) デフレ状況に入ったが、財政的に健全にしよう

を合言葉にその具体案に尽力いたしました。

まず、魅力のある会にするために当時インターネットの普及で、各方面でホームページを開設する動きに合わせて、母校の事情・洛友会関西支部の催し物の御案内・各種会議の内容をのせることにしました。記事のをせることは大変な労力が必要ですが、献身的努力で楽しい記事を書いていただき心から感謝しています。会員各位からのアクセスもかなりあり皆に親しまれていることを喜んでいきます。

何といても秋の家族見学会が親睦のメイン事業です。あれやこれや考えた挙句、その時ちょうど和歌山県で南紀熊野体験博が開催されていましてので京都・大阪から南紀特急の「オーシャンアロー号」に乗り、白浜を中心に開催されている博覧会を見学することにしました。歴史が数多く残っている熊野古道の一部でも足を踏み入れたかったのですが時間的余裕が無く、白浜海岸・南方熊楠記念館・熊野博覧会・とれとれ市場での新鮮な海の幸の買い物・ホテル古賀の井での楽しい昼食に160人以上という大規模な会員とご家族が

参加され、秋の一日を楽しむことができました。後日談になります。が、次の年のゴールデンウィークに妻と共に2泊3日で熊野古道の一部を散策しました。新緑の下で澄み切った空気を胸一杯吸い込み、後白河上皇らをしのびつつ蟻の熊野詣をして本宮大社や那智の滝など南紀を満喫することができました。時間があれば訪れられることをお勧めいたします。きっと心の癒しとなることでしょう。

財政面での改善についてはまず会費の納入率の向上を目指しました。一時は50%を上回っていたようですが、年々減少し、平成9年には40%まで低下していました。

そこで各年次の幹事が手分けして会員に連絡してもらうと共に、多数の卒業生を擁する企業にお願いした結果、45%を上回る好成績を残すことができました。現在会員が各分野で活躍できるのも京都大が学電気系を卒業させていただき、多くの卒業生との交流があるからこそであり、この会が発展するのとでも喜びを共有できるのではないかと思っています。現在まだ低下傾向をたどっているようですが、社会あつての個人であることに思いをいたし、50%を目指して一人一人が意識を持って協力していただきたいと思います。

今ひとつは2年毎の会員名簿作成でありました。前回スポンサーから集めていただいた15倍を目標にいたしました。何と前回の2倍もの応募をいただきました。厚

く御礼申し上げます。

私の後は日本電池の田中社長にバトンを渡し、なんとも責務を終えることができ皆様のご協力に感謝いたしております。

その後、日本経済は深刻なデフレに突入し政治・経済とも国内に不安定な状態が続いています。この殺漠とした時代にあつて、心のよりどころはやはり故郷である母校への思いではないでしょうか。今一度「日本人の良さ」と心を取り戻すためにもこの50周年を期に洛友会のもとに集い、益々の発展を祈念したいものです。皆様のご活躍・ご健勝をお祈り申し上げます。

### 「洛友会50周年」によせて

皆川 長也 (昭35年卒)

春の支部総会で、支部長以下当年度の体制が決まることとなるが昨年は大阪にて本部総会と同時に開催され、そこで大阪メディアポート伊藤副社長様(現社長、昭和34年卒)より支部長を引き継ぎました。そのときの本部総会で近藤先生(現会長)より「洛友会が50年になる」そして先生ご自身が「若い頃よりずっと携わってきた」とのことをお聞きし、その長い歴史を、そして支部長の責任の重大さをずしりと感じた次第であります。

今回50周年会報を出されることとなり、そこに現支部について書く機会を与えられたことは非常に光栄に感じております。余談には

なりませんが「洛友会」という名称はすばらしく、「古き良き京の都に共に学びし者が相集う」ということであるところとあり、私が入社したとき、そこに「洛友会」があり、早速入会、またある年月が経ち同期が集うと「洛友会」を立ち上げました。また私の所属するゴルフクラブにも「洛友会」があり、入会しております。このように洛友会はいろんなところに広がりをもっているようであります。

さて、私の支部長の任期もあと少しとなり全力をあげ、全うしたいと思っておりますが支部長会社として電工会社は初めてでありまして私の会社には会員の若い人が一人だけで今回は関西電力さんにお世話をさせていただきました。総務幹事には48年卒の大津谷正和君、会計幹事には57年卒の福田隆君になっていただき苦勞をおかけしました。私どものただ一人の若い長谷川光宣(平成8年卒)君も私と幹事さんの連絡をよくやってくれました。皆さん方に心から感謝している次第です。

この体制で今年度は  
◎卒業生皆さんに楽しく、魅力ある関西支部として特に若手が参加いただけるように  
◎財政の健全化、若手が参加し出せば納入率も上がるだろうとの目標のもと努力してきたつもりであります、その結果のご批判を待ちます。

さて、魅力ある会として大勢の参加特に若手の参加ということで

皆さんに会の内容の周知ということで支部ホームページを立ち上げておりますが中味を充実していくと共に本部ホームページを立ち上げ連携をとっていく必要があると思われれます。

財政に健全化については非常に難しいことではあります、平成11年に特別活動され納入率が40%台のから45%台にあがった実績が継続されていまして今年時は時節柄特に厳しいようであります。皆様のご理解が得られるよういっその努力が必要と思えます。

何といても我々として秋のビッグイベントの家族見学会を如何に実施するかが使命であります。役員一同相集い、会員の皆さんが家族共々参加したいと思うものは何か、意見交換しましたが昨年のUSJのようなビッグイベントは今年も関西にない。いろいろのやり取りの中で今までやられていなかった「自らが体験してもらうこと」を入れ、チボリ公園を組み合わせたこととしました。計画を決定するまでが大変でした。

実施日は早朝よりの集合でしたが関西電力よりの大勢の世話役をお願いし特に目立ったのは多くのお子さん・お孫さん連れが参加され、初めての土こねを楽しまれていただくようです。作品は焼きあがってから届くことになり、皆さんは楽しさを後にも残されて終えたようでした。先般の役員会の際、近藤先生から「良い作品が届いたよ」とのお話があり、体験コースも良かった

良かった

たのかなどの思いをいたしました。本年の総会も6月15日に決め、3月中に次期体制へ引継ぎを終えたいと思っております。次の支部長は、また当社の細田純一郎君(株)きんでん専務、昭和36年卒)であり、副支部長には三木弼一君(松下電器産業(株)専務、昭和37年卒)にまげてお願いいたしました。本年度は2年に1回の名簿作成の年にもなりません。名簿のCD-ROM化等も提案しましたが、現行の名簿作成となるようです。皆様方の一層のご協力をお願いするところであります。

今の世の中は、経済はデフレからの脱出がままならず株価の低迷等混沌としており政治においてはイラク・北朝鮮問題解決は先の見えない状態にあり戦争の危険性ははらんできております。

卒業生の皆さんにおかれては、このような中で各界でご活躍中と思いますがこのような時だからこそ心のよりどころとして、いやしどころとして「洛友会」の存在意義は高まってくるものと思えます。本年は「洛友会」は50周年。みんなの故郷として一層発展していくことを祈念して50周年のお祝いも含めての寄稿とさせていただきます。

関西支部の活動状況について

福田 隆 (昭57年卒)

洛友会50周年おめでとっございませす。一口に50年とはいいますが、

本会のような全国的規模なOB会でありながら安定した活動を50年間継続しているOB会は少ないのではないのでしょうか。これも洛友会会員各位の本会に対する理解・支援があるのは勿論ですが、歴代の会長以下本部事務局の方や各支部の幹事の方の並々ならぬ努力があつてこそだと思えます。改めて本会の底力を感じる次第です。

そういった歴史ある洛友会の50周年を記念する会報に私のような若輩が寄稿させていただくのははなはだ僭越ではございますが、それぞれの時代の思い出について諸先輩にお任せするとして私からは関西支部の活動状況についてご報告したいと思えます。

関西支部は、洛友会のお藤元ということもあり会員数約2700名と支部の中では会員数が最大の支部です。年間の主要行事としては、6月の支部総会(隔年で本部総会と共催)・秋の家族見学会・年2回(春と秋)のゴルフ大会があげられます。その他に他の支部と同様隔年で広告募集をおこなっているほか、会費納入率の向上に向けた取り組みや日11年に開設したホームページの更新といったこともおこなっております。

主な活動は以上のとおりですが、今回はこれらの活動の中から「家族見学会」について「苦労話」を交えて少し詳しく報告させていただきます。と思います。

「家族見学会」については、関西支部では例年10月頃に開催して

おり会員の参加人数・世話役の人数・長期に亘る準備と当日に要する労力、といった点から年間行事の中で最も重要な行事となっております。毎回博覧会などイベントがあれば、そこを中心として名所・旧跡など観光スポットを付加する行程を基本にしております。洛友会からの補助により格安の費用で参加できることから例年100名を超える参加(多いときには200名を超える場合もあります)をいただいております。旅行会社のツアーというよりは修学旅行に近い人数になります。これほどの多人数が参加する見学会でありながら関西支部では従来から旅行代理店に任せるのではなく幹事会社を中心となつてプランの策定から案内状の送付・集約、当日の対応を一手におこなっております。当然幹事会社は旅行業を仕事にしている会社ではない場合がほとんどで、まった

くの素人が旅行代理店の力をお借りしながら一から準備を進めることとなるので準備にかなりの時間と労力を必要としますし、当日の世話役も10人を超える人数が必要となります。そういった「家族見学会」を実施するにあたり、まず準備段階で特に気を使うのが「昼食場所」と「利用する交通機関」です。「昼食場所」については、昼食時に支部長挨拶(会長が参加されていれば会長挨拶も)をするのが恒例ですので100名を超える参加者が一堂に会して食事できる場所が必要となります。また、関西

支部では参加者にできるだけ満足していただける昼食を提供することにしており、「広さ」と「味・ボリューム」を兼ね備えた昼食場所を選定する必要があります。ただ、行程の途中でそういった昼食場所を探すのは非常に難しく、しかも行楽シーズンであることから早期に予約する必要があるが最初に最も思案するところです。次に「利用する交通機関」ですが、通常は「バス」を利用する行程で考えますが行程によっては時間的にどうしても「列車」を使う必要がある場合が出てきます。「バス」であれば、集合時間に遅れる方がおられても時間調整ができますが「列車」ではそういうわけにはいきません。また乗り換え時には100人を超える人の誘導をスムーズに行わないといけませんし、座席はできるだけ家族単位で座っていただけのように配慮するなど「列車」を使うとなると「バス」とは違った苦労が出てきます。準備段階ではこれ以外にも予算の設定、参加される方の集合場所・解散場所の確認、遅れた方への対応など決めておく必要のある事項がありそれぞれ大変ですが、紙面の都合上今回は省略いたします。次に「家族見学会」当日ですが、準備をいくらか用意周到におこなつていてもいざとなると準備段階での抜けや思わぬハプニングなどがあり臨機応変な対応が必要となります。関西支部では集合場所を通常京都と大阪の2箇所設定しており相互の連

絡は密にしておく必要があり携帯電話での相互確認はもろんのことと集合場所への誘導役・参加費用の徴収役など多くの世話役を配置して万全を期すようにしています。それでも急遽参加できなくなる方や参加する予定であるが時間になつても来ておられない方が出てくるなどこれらの事象を想定して対応手順は決めていても右往左往する状況です。人数確認が終了し一旦出発すれば一段落で、あとはポイントとなる場所での人数確認さえしつかりすれば比較的スムーズに進みます。帰りも交通渋滞に巻き込まれ帰着時間が遅れることがなければ、解散時に忘れ物をチェックして一大行事が終了します。

このように関西支部の「家族見学会」は旅行代理店の方の手助けはあるものの素人が最初から組み立てるツアーであり、旅行代理店の方の日ごろの苦労が身にしみてわかりやすく、参加された方が満足いただけたか不安にもなりません。後日参加者の方からお礼の手紙をいただくこともありその時には言い知れぬ満足感があります。また今年も満足していただける「手作りの家族見学会」を目指して今年度の幹事が準備に入つたところですが、今年も例年以上に多数ご参加していただけることを期待してやみません。

関西支部会計幹事

●●東京支部●●

洛友会50周年記念に想う

木村 清治 (昭22年卒)

「洛友会結成のころ」

まずは洛友会50周年、心からお祝いを申し上げたい。私は、洛友会の胎動時代ともいえる昭和22年、卒業と同時に生まれ育った京都を出て関東配電(当時。現東京電力)に入社したのであるが、会社におられた京大電気先輩は、常任監査役の佐藤穂徳さん(明治44年卒業、今はすでに故人)ただお一人であった。あまりにも大先輩であられたことに加え私自身入社後すぐに三交代勤務の現場に配属されたこともあって、お目にかかる機会が得られないまま過ぎていたところ、一時昼間勤務になっていた昭和26年ごろのある日佐藤さんに呼ばれ、洛友会結成・東京支部発足の仕事を手伝うように言われた。大先輩の手伝いができるということもさりながら、重役に親しく話をしてもらっておおいに感激しかつ嬉しかつたことを覚えている。

手伝った内容は、結成のためのもろもろの資料の作成や整備といったことではなかったかと思う。結成活動の実際は、松尾三郎さん(昭和13年卒業、すでに故人)、筑木二郎さん(昭和14年卒業、平成15年1月1日逝去)、老田他四郎さん(昭和20年卒業)といった諸

先輩が中心になって推進しておられた。間違っていればご叱正をいただきたいが、その頃すでに東京方面在住の先輩がたには洛友会と名づけた集まりもあつたやに聞いた記憶もある。その洛友会かあるいは全国組織となつた洛友会かは忘れたが、新入りは会費無料ということで勇んで出席したのに、前述の佐藤さんや乙葉眞一さん(大正7年卒業、今はすでに故人)といった威厳のある大先輩の前でただ畏まっているばかり。今思い返してみると、当時の大先輩と新入りの私どもの年令差は、今の私どもと洛友会新人とのそれよりも少なかったかもしれないのである。せっかくの同窓会も息が詰まるというので、誰いとうとなく若い者でなにかやるうではないかということになり、青年部などと自称して集まり洛友会を面白くしようと僭越なことを考えたりした。いくつかの総会の懇親の部で、出席者の平均年令を当ててもらつてささやかな賞品を出すなどの企画をやつたところ大先輩にも結構うけて盛り上がったのも懐かしい思い出のひとつである。

先にふれたがここにあらためて、今年早々に亡くなられた筑木二郎先輩のご冥福を謹んでお祈り申し上げる。

「若い人たちがもっと参加する洛友会に」

前述のように卒業して間もないころ洛友会とのかかわりを経験した後の私は、洛友会東京支部のお

手伝いをなにとつすることなく過ぎてきた。そのなかで、洛友会と疎遠にもならず精勤とは決していえないが総会や旅行会、見学会などに随時気軽に参加できてきたのも、若かりしころの先輩との交わりがあつたからではないかと思つている。

今は、支部長、副支部長、庶務幹事、会計幹事のかたがたが、先輩・後輩の關係にあつていっしょに会の企画・運営に当たつたような年次構成にすることや適当な期間で後の年次に交代していくルールが確立されているのはたいへん結構なことである。洛友会が今日までの50年を發展してこられたことができたのもこのルールによつてつねに気鋭の役員が任に就かれ、洛友会の活性化をはかることに努力してこられたことによるところ大なるものがある。それでも総会の時など、卒業して間もない若い世代の参加がまだまだ少ないように見うけられる。今の若い世代は洛友会に対していったいどのような意識を持つているのだろうか。この世代を集めて座談会でもやってみたら面白いかもしれないと思つたりもする。極端な言い方であるが、洛友会の永続的發展は若い世代が主体的・積極的に参加していつてくれるかどうかにかかっていると

いってよいのではないか。このことは洛友会の絶えざる課題であり、役員のかたがたはつねにそのため心胆を砕いておられることと拝察し、私ごときが僭越な愚見を

申し上げたことをお詫びしたい。  
「おぼろ会のこと」

複数年次を連ねるグループ活動は、どなたの発案だったのか洛友会の活性化に寄与するすばらしいアイデアであつたと思う。私ども昭和21年から24年までのグループは「おぼろ会」と称してやつている。名付け親は日下部悦二さん(昭和21年卒業、いうまでもなく「月はおぼろに東山……」からとられた「おぼろ」である。おそらく他のグループには見られないままに「洛友」らしい京情緒そのままの優雅な名前であることを自慢したい。幹事は年次持ち回りで、発会以来ずっと会食のみの懇親だったのがいつしか講演とか、ちょっとした見学が計画されることもあるようになった。このような複数年次を連ねるグループ活動がなんらかのうまい工夫によつて異世代間にまで広げられるようになれば洛友会のさらなる活性化にもつながるのではないだろうか。

東京支部学年別グループ活動

59洛会の歩み

近藤 貞吉 (昭28年新卒)

洛友会東京支部における学年別グループ活動は、卒業後およそ30年を経過した時点で結成され、活動しておられる様でした。学年ごとのクラス会は、それぞれ学年幹事のご努力で顔合わせをしておりますが、こと学年別のグループの発足となると、そう簡単にはこ

とが進まないようです。学年の枠を越えて集まろうと言うには、卒業後の社会での活動範囲が広がり、公私に亘つて面識が広がってきたころにならないと、学年別グループ活動を始めようと言う気持ちにならないのではないのでしょうか。およそ30年の社会活動の中で培ってきた、人脈、情報脈など共有できる情報を持つた卒業生が、洛友会と言うよしみのもと、会い集うことに学年別グループ活動が意味を持つてくると思います。

すでに活動されてこられた、鶴友会(明治・大正卒)、洛東会(昭和2・7卒)、らつきよう会(昭和8・11卒)、洛楽会(昭和12・16年12月卒)、東友会(昭和17・20卒)、おぼろ会(昭和21・24卒)、デルタ会(講習所卒)の7グループに引き続き、洛友会東京支部からの要請もあり、漸く昭和25・29年組がその気運になってきました。

59洛会のスタート

昭和25・29年卒(約125名)を代表する各学年幹事で相談の結果、何はともあれ一度集まつて、グループのニックネーム、活動方法などを決めようと言う事になり、昭和59年9月17日(木)18:30から、沖電気目黒クラブにおいて発会式を行いました。

(1)会のニックネームは、グループが25・29年卒で構成される事から「5」、「9」を活かし、洛友会に因んで「洛」を組み入れた「59洛」会と決



情けなくなった。昭56年私がIMDに滞在時には日本を本とした研修テーマが多かった。

私は現在日立の子会社の監査役として、日立グループの再生に頑張っているが、電機産業を始めとして日本の製造業が強くないと日本は沈没の危険性がある。洛友会の一員として、強く責任を感じており、次のような提言を行いたい。

(1) 製造業の復活こそ日本の経済を再生する。銀行等金融機関への税金の投入も必要であるが、新技術開発への産学協同研究にもっと高い優先度で国家資金を投入して欲しい。これは企業の研究開発への優遇税制も含む。企業を代表する新製品を開発し、ブランドイメージを向上させる必要がある。企業は大きいだけでは尊敬されない。社員が生き生きとして、新製品を開発する企業であれば、市場も顧客もこれにに応じてくれる。市場こそ企業のあり方を決定してくれる大切なフィードバックポイントである。エンドユーザが欲しいものを作り、こそソリューションである。

(2) 新システムの開発が日本の情報通信産業を活性化する。私のいる情報サービス業界は残念ながら舶来品のソフトが氾濫しており、情報処理学会でも国産ソフトがなぜ生まれぬのかというシンポジウムをやる位である。99%が外国産、しかもブラックボックスであり品質が必ずしも高くない。その

上色々な海外産ソフトを組み合わせるとシステム事故が頻発する。これを解決するには自分の頭で作ったソフトの比率を今の0.数%から1%、さらに10%以上へ上げる必要がある。ウインドウズ、JAV Aなどに負けない国産ソフトが望まれる。そのため、顧客が必要とする新システムを実現する国産・自主ソフトを顧客と協同開発することが重要である。

阿部清先生と仲が良かった星合正治先生が昭34年日立中央研究所長になられて、星合三原則を作られた。

- i お手本のある研究はとりあげまい。
- ii プロジェクト中心に協力しよう。
- iii タイミングよく成果をあげよう。

いつの時代でも大切な勘所であり有言実行したい。とくにお手本のない新システムを産学協同プロジェクトで開発することが日本の情報通信産業を活性化する。

(3) 米国IBM社は製造業のお手本である。ガースナー元会長がナビスコ社から招かれた時ビスケット屋に何ができるかと思える人が多かった。しかし、今のパソコンは誰でも作れるビスケットのようのもので、IBM・PCのブランドを一流にした経営の勘所は、常に市場・顧客から見る姿勢をもったガースナー元会長の経営センスの良さである。さらにIBMが顧客へクイックレスポンスするために意志決定の階層を3階建て(事業

部長―部長―担当)にし、webを顧客窓口に行っている。これは日本企業の8階建以上の遅い意志決定と無責任体制を大きく改良したポイントである。研究開発でも銅配線CMOSなど世界NO1である。

(4) インターネットとデジタルの良さを知る。阪神大震災で電話は通じなかつたのにパソコン通信は通じた。これは40年前に米国防省(DOD)が核攻撃で通信回線が潰滅しても、部分復旧した回線をたどって通信できる新システムを作れ、と要求して開発されたARPANETがインターネットの母体である。その基本はパケット交換方式で今ではIP電話の通話料バカ安時代を実現している。

TVの信号圧縮・再生MPPEGもデジタル時代の新技術である。米国はインターネット、デジタル記録・メディア・放送など具体のニーズを発端とした新システム開発から、重要な新要素技術を生み出した。これがシステム先導型開発で米国の強さはここにある。

(5) 電気屋の等価回路理論こそシステムモデリング、制御理論の基礎である。私はビジネスモデルの成功例やノーベル経済学賞受賞理論を制御理論とくにごこからフィードバックし、どこを駆動するのが正しいかを見ている。システム制御技術は製造業から国の経済まで何にでも適用できる。システム制御理論に強い企業や国家は伸びている。

(6) 学生時代先生方からみっちり自分の基礎を勉強したことが今の自分の技術力となっている。時代は変わっても電気・電子の基礎を正しく教えていただくことが日本の製造業を強くする。また、どこにいても特許と論文を発表することとトップレベルの学者、技術者との交流のため学会に入ることが必要である。企業では「正しく人を集め、能く之を養う」と説いた日立の馬場大変人の教えを有言実行したい。

まとめとして、公正な競争市場とシステム先導型研究開発がキーである。製造業の復活を願う。

<http://www.rakuyukai.org/>

伊藤 八大 (昭54年卒)

右記は、洛友会東京支部のホームページのアドレス(URL: uniform resource locator)である。インターネットに接続できる方は、ぜひ一度アクセスし、覗いていただきたい。ご覧のようなページが表示され、洛友会東京支部の活動内容、支部会則、洛友会の歌などを見て頂ける(洛友会の歌は曲を聞いていただけ) ようになっている。

1998年(平成10年)のゴールデンウィーク中に洛友会東京支部のホームページを作成し、5月3日に開設してから、間もなく5年になる。この間、歴代の支部幹事などによって内容の充実が図られ、洛友会活動を会員の皆さんにお知らせすることに多少なりとも



役立ってきたと考える。また、電子メールの活用も定着してきた。5年という節目を迎えるにあたり、ホームページを初めとする洛友会のIT化について簡単に振り返ってみたい。

(1) ホームページ開設のきっかけ

会費納入率の低下、また洛友会活動への参加率低迷(特に若手)が問題視されて久しい。洛友会がどういった活動を行っているかが十分に伝わっていないことも、要因の一つと考えられる。一方、会員各位が電子メールのアドレスを持ち、インターネットが使えるようになってきたこともあり、1998年4月の東京支部幹事会にて、ホームページ開設による会員各位への洛友会活動に関する情報提供と、各種連絡に電子メールを活用していくことを決め、その後本格的に支部活動にITを活用・推進してきた。

(2) IT化の推進とメリットについて

当初、1999年総務幹事であった私個人のホームページの一部を間借りして始めた東京支部のホームページであるが、その後の支部幹事の濱野氏、大橋氏などのご努力により、冒頭に掲げたとおり、念願であった独自アドレス <http://www.rakuyukai.org/> を取得し、また掲載されている内容もますます充実してきている。各種の総会などの会合報告、サークル活動、趣味の会の報告、見学会、旅行会などの報告を画像も交えて掲載すると共に、旅行会、総会の参加申し込みも行えるようになった。

このように、ホームページや電子メールを活用することにより、会報や葉書等による活動内容の周知に比べ、迅速な連絡が可能、過去の行事などの情報にも簡単にアクセス可能、地方に赴任されている方や外国在住の洛友会会員でも情報入手可能、ホームページや電子メールによる連絡により事務処理の効率化が可能 などの多くのメリットが得られている。

(3) 今後の展望

インターネットや電子メールのさらなる活用などを通して、洛友会活動を会員諸氏にとってさらに有益で意義のあるものにする事を期待する。お互いの懇親ならびに、内容・情報の充実した交歓を目指し、大学関係の最新情報や会員の活動情報などを紹介するなど、ホームページの魅力アップの

工夫も必要と考える。このような情報提供を通じて、できるだけ多くの会員の方、特に若い会員の方々が洛友会活動に参画し、メリットを享受してもらいたいと思う。

なお、関西支部でもホームページを開設している (<http://www.kisweb.ne.jp/rakuyuu/>) が、これらを含め、洛友会全体で統一したサイトになり、洛友会会員全体の役に立つものに洛友会ホームページが育っていくことを念願している。

東京支部50年の歩み

柴沼 敏郎 (昭58卒)

洛友会東京支部は、本部と同様に今年度で50周年を迎えることとなった。現在、東京支部の在籍会員数は約1900名で、総会、講演会、旅行会、見学会、趣味の会、拡大クラス会、ホームページ運営と多岐に亘って精力的に活動している。半世紀に亘り継続出来ているのも、諸先輩方々の並々ならぬ情熱と努力の賜物であり、深く敬意を表するとともに、今後も継続していくことを願う次第である。

洛友会の成り立ちについては昭和57年の30周年記念誌に記されている。少し抜粋させていただくと「昭和24(26年頃か)東京では東京在住の卒業生有志が読書会を作り各自の研究発表をなすとともに親密な連絡をとっていたので、これ等の人々から同窓会を作ったどうかという議が起り、乙葉真一

氏あたりから熱心に加藤教授や阿部教授にもちかけて来た。そこで昭和27年春頃に阿部教授はこれをもち帰って電気教室の会議室で教官連との協議会を開いたのである。その結果…」として洛友会結成へと発展したとある。また「東京支部の発会式は昭和28年2月12日(洛友会の創立から約3ヶ月後)に、盛大に催され、初代支部長に佐藤穂徳氏(明44卒)、副支部長に乙葉真一氏(前記)が選任され、筆頭幹事は筑木二郎氏(昭14卒)であった」と記されている。

30周年記念誌に記載された活動は、50周年を迎えた現在でも、ほぼそのまま受け継がれている。当時から新しく付け加えられた事柄としては、東京支部ホームページ(平10年)と、東京支部会則(平13年)が挙げられる。また広告収入の強化(平1年)による活動費の充実も挙げられよう。ホームページについては伊藤八大氏の記事を参照願いたい。東京支部会則は支部活動の取り組みを明文化し若い世代にも伝えることを目的として平成14年6月16日に施行された。広告収入は、企業別割り当てなどにより平成元年から平成11年まで増え続けた。最近では経済の低迷で広告収入の確保が厳しい状況になっている。

各活動の近年の状況を列挙すると、講演会では、「産学連携を考える(京都大学松重和美教授、アジレント・テクノロジーズ株式会社代表取締役社長成松洋氏)」「プロ

ードバンド時代の到来と起業家精神(イー・アクセス株式会社CEO千本倅生氏)」「21世紀、日本新生に向けて(アサヒビール相談役名誉会長樋口廣太郎氏)」「情報通信ビックバンの時代IR&Dとアプリケーション(ノンフィクション作家・山根一真氏、京都大学総長・長尾真氏)」などを実施している。

見学会では、「ゲノム研究の最前線(理化学研究所横浜ゲノムセンター)」「ユビキタス(産業技術総合研究所)」「DNA DoMore&Dセンター」「電子顕微鏡(日立基礎研究所)」「リニアモーターカー(JR総研)」などを訪問している。

旅行会では、「茨城県の那珂湊・磯崎海岸」「西伊豆戸田の紅葉と高足ガニ」「アクアライン(海ほたる)と房総半島」「奥秩父冬桜鑑賞と長瀨ライン下り」「水戸偕楽園観梅とあんこう鍋」などの行楽を実施している。

趣味の会では囲碁会、将棋会、麻雀会、ゴルフ会、洛謡会、テニス会が活発に活動している。

卒業年度が5年毎のクラス会である拡大クラス会も、洛楽会、東友会、おほる会、五九洛会、みとおし会、京極会、洛粋会が各々活動を実施している。

このように洛友会東京支部は非常にアクティブであるが、洛友会のさらなる発展のためには、IT(特にネットワーク)を更に活用することで、若い世代も巻き込み

つつ、テーマを決めて英知を集約し、世の中に貢献できる事業が展開できればと考える次第である。最後に50周年の記録として歴代の支部長名などを記して筆を置く。

東京支部歴代支部長

- 昭28〜29 佐藤 穂徳 (明44卒)、昭30〜31 巽 良知、昭32〜33 菅 琴二 (大14卒)、昭34〜35 富永 和郎 (大14卒)、昭36〜37 橋本 真吉 (大14卒)、昭38〜39 石川 辰雄 (大15卒)、昭40〜41 山本 三郎 (大15卒)、昭42〜43 久野 清 (昭4卒)、昭44 青木 三郎 (昭5卒)、昭45 西本 憲三 (昭6卒)、昭46 吉岡 俊男 (昭7卒)、昭47 和氣 幸太郎 (昭8卒)、昭48 市村 宗明 (昭9卒)、昭49 高木 正 (昭10卒)、昭50 中山 健一 (昭11卒)、昭51 正木 知己 (昭12卒)、昭52 富岡 正春 (昭13卒)、昭53 筑木 二郎 (昭14卒)、昭54 相木 一男 (昭15卒)、昭55 永安 弘 (昭16卒)、昭56 尾繩 貞男 (昭16卒)、昭57 古川 満智雄 (昭17卒)、昭58 小田 敏彦 (昭17卒)、昭59 木村 小一 (昭19卒)、昭60 老田 他四郎 (昭20卒)、昭61 日下部 悦二 (昭21卒)、昭62 中島 達二 (昭22卒)、昭63 坂田 邦寿 (昭23卒)、平1 三浦 武雄 (昭24卒)、平2 西岡 博 (昭25卒)、平3 笹岡 健三 (昭26卒)、平4 重本 直三 (昭27卒)、平5 武藤 良介 (昭28卒)、平6 近藤 貞吉 (昭28卒)、平7 伊藤 利朗 (昭29卒)、平8 萱島 興三 (昭30卒)、平9 近藤 光洋 (昭31

卒)、平10三橋 堯(昭32卒)、平11廣 豊(昭33卒)、平12川本 幸雄(昭34卒)、平13角 忠夫(昭35卒)、平14和田 昌美(昭36卒)

●東京支部総務幹事(30周年以降)  
昭58森 護(昭35卒)、昭59松本 慎二(昭40卒)、昭60来山 征士(昭42卒)、昭61木戸出 正繼(昭43卒)、昭62阿部 保之(昭43卒)、昭63林 敏之(昭44卒)、平1松尾 義武(昭45卒)、平2高重

●●中部支部●●

本田静雄を慕って

支部長 大野 彰(昭25年卒)

昭和25年春、京都大学電気工学科を卒業し、地元企業の、名古屋鉄道(株)に入社しました。

京都大学入学当時(昭和22年)は、京都帝国大学でしたが、駐留軍最高司令官、マッカーサー元帥の命により、「帝国」を削除され、些か寂しい思いをしたことを思い起こしています。

卒業当時は、まだまだ戦後の混乱期で衣・食・住とも不足がちな不自由な時代でしたが、朝鮮動乱の勃発によって景気は急速に回復し「最早や戦後ではない。」との宣言が出されたのは、昭和31年のことでした。

叔、洛友会中部支部総会に出席し、初めて本多静雄会長にお目にかかり、その御薫陶を受ける幸運に恵まれました。

哲夫(昭46卒)、平3杉山 守(昭47卒)、平4谷口 治人(昭48卒)、平5嶋谷 吉治(昭49卒)、平6横川 文彦(昭50卒)、平7辻本 雅彦(昭51卒)、平8七原 俊也(昭52卒)、平9永井 啓喜(昭53卒)、平10伊藤 八大(昭54卒)、平11濱野 宏(昭55卒)、平12大橋 正良(昭56卒)、平13小倉 光裕(昭57卒)、平14柴沼 敏郎(昭58卒)

会長は、日本技術株式会社、日本電話施設株式会社等を設立、社長に就任されるなど、企業家、経営者としての才腕を遺憾なく発揮される一方、日本古来の文化に多大の関心を寄せられ、御屋敷の近辺、猿投山山麓から出土する陶片を収集、調査し、猿投山西南麓古窯址群の発見、発掘をされました。

当時、近くに移り住んで居られた加藤唐九郎氏とは親交深く、焼物談議に花を咲かせられた事でありましょう。以後、唐九郎氏に対しては公私にわたり支援を重ねておられました。

少々逆のようですが、終戦の頃、電力王、松永安左工門氏との出会いで、茶道具一式を貰い受けられ、爾来50年余、茶道に親しみ、明治村茶会の運営にも評議員として携わること、なされました。

茶会の某日、村内で会長にお目に掛かりました折、洛友会の次期中部支部長を託される羽目となりました。日頃「百才まで生きる。」とおっしゃっておられましたも

の、90才余の御高齢の事とて、ご負担を軽くする為、やむなき事と存じました。

会長は誠に多才な御方でありました。ご趣味は茶道に止まらず、狍犬を集められたり、能楽を嗜まれて、猿投の御屋敷内に能楽堂を建てられ、昭和31年以来、毎年春観桜会を催し、各界の名士・知人を御招待になり、自らも自作の狂言に出演される程の熱の入れようでありました。此の能楽堂前の桜は、会長御誕生の時、父上が植えられたものと聞き及んでおりますし、平成11年6月3日出版の「百寿翁新作狂言集」は絶筆となりました。

桜の樹齢は、ほぼ百年と云われます。やがて会長御夫妻の後を慕って、土に返ることでしょう。

尚、御交遊のあった著名な文化人としては  
加藤唐九郎 氏 陶工  
杉本 健吉 氏 画伯  
鷺見 房子 刀自浄瑠璃作家  
等の方々を名を連ねておられます。

中部支部2代目総務幹事 始末記

石川 進(昭26年卒)

初代中部支部長は名工大学長の清水勤二氏(大12年卒)。清水氏の逝去により二代目支部長に本多静雄氏(大13年卒)が就任されました。昭和62年卒寿を期に現支部長大野彰氏(昭25年卒)にバトンタッチされるまで実に30年、長期

支部長でした。

本多さんは日本電話施設(株)や(株)FM愛知を創設され、支部長にご就任当時既に中部財界の重鎮として、又陶芸の研究・収集そして狂言の創作と公演(自演も含む)は趣味の域を脱してしました。氏が技術者であることよりも、趣味の方が有名と言う中部財界の超有名人でした。

総務幹事は支部開設以来ずっと古田久一氏(昭和6年卒、当時名古屋市交通局電気部長、退職後は名城大学教授)でした。「支部の活動が低調だ」と色々「活性化案」を打ち出され、我々にも協力を求められましたが、成果は今一でした。当時私は社会人7〜8年、仕事も忙しく同窓会に出ても長老ばかりで、余りなじみず、行事も欠席がちでした。

中部支部最大の行事は「総会」と「秋の家族同伴行楽会」です。たまたま私が名古屋鉄道に在職、勤務地が名古屋駅前と言う事もあって、何となく古田さんのお手伝いをしていました。古田さんは昭和61年4月、80歳で急逝されたのですが、「俺も年だが、本多さんが支部長をやっておられる以上、総務幹事を止めるわけにいかん。」と頑張っておられました。古田さんは本多さんと年齢も近く、何事も「阿吽の呼吸で、実に名幹事でした。行事も本多さんに「おんぶに抱っこ」が多く、春は本多邸の「陶芸と観桜の会」で支部幹事会を済まし、秋は日本電話施設主催の志

摩半島の五ヶ所湾(七日島)の観月会に便乗と言ったものが定番でした。

その古田さんが本当に「急逝」されたのです。急逝の一週間前、ベルサロン(日本電話施設の8階、同社社員・OBの溜まり場で、ここに中部支部の事務局を置いていた。)で小生と碁盤を囲んだわけですが、お元氣そのものでした。葬儀には会員有志が参列、本多さんが弔辞を読まれ、氏のご冥福をお祈りしました。中部支部は本多さんと古田さんで持っていたようなもの、古田さんの代わりは余人には出来ない事ですが、結局「古田さんとお付き合ひの深かったお前がやれ」と後を引き受ける羽目になってしまいました。

総務幹事といっても、実務はFM愛知の前原さん(昭和28年新制卒・現在同社社長)がやって頂くので、そう負担というわけではありませぬ。ただ古田さんのやり方を踏襲しただけ、会員の皆様に多大な迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます。私が総務幹事を引き受けて1年後、本多さんは支部長を大野彰氏に譲られ、引き続き顧問として我々をご指導頂きました。そして平成11年5月ご逝去、享年百一歳の大往生でした。大野さんも既に16年の長期支部長を勤められました。そして本年度総会にて後進に後を託される事になっていきます。

私と古田さんと違った事と言えば、「秋の家族同伴行楽会」が遠出ができる様になった事ぐらいです。

ようか。京都、高山そして平成13年度の“世界遺産・白川郷”です。

大野さんが岐阜乗合バスの社長で、お値打ちにバスが使えたのが幸いです。そして私が、総会や行楽会などの行事で「校歌代わりに、琵琶湖周航の歌を歌おう」と提案し、ご了承頂きました。京都大学には昭和15年制定の素晴らしい学歌があるが、曲が荘重そして歌詞が若い人になじめない為か、殆ど歌われないのが実情です。創立百周年事業で学歌が募集されて出来なかつた経緯があります。周航の歌は三高の寮歌だが、実際に一部京大生（OBも）間で校歌代りに歌われている事、そして京都大学と三高は同根（京都帝大は明治30年、三高の前身・第三高等中学校を母体に生まれ、第三高等中学校は第三高等学校になった。琵琶湖周航の歌は大正7年三高生の小口太郎が作詞、(曲は当時歌われていた吉田千秋作曲“ひつじ草”を借用)最もよく歌われた寮歌の一つです。そして戦後の学制改革で旧制高等学校は消滅、三高は京大に吸収されました」と言う理由です。

私も数年で古田さんの亡くなられた年になります。大野支部長交替も決まり、新体制が確立されるでしょう。そして総務幹事も若い人が、新しい感覚で支部を運営して頂ける事を期待しつつ筆を擱きます。

### 中部支部のゴルフコンペ

遠藤 茂 (昭27年卒)

洛友会が50周年を迎えられ、役員並びに事務局の皆様のご苦勞の賜物と、深く感謝申し上げます。

我々昭27の同期会は、昨年平成14年に卒業50周年という事で各人の原稿を募り、文集を作つて懇親会に合せて配布した。即ち我々の社会人生活と略同じ年数になり、より一層懐かしさを感じます。

若い頃の同窓会の支部活動としては、勤務先が名古屋駅近くにあったのですが、何かと仕事に追われて出席し難く、又たまに出席しても、長老ばかりで仲々溶け込み難く、敬遠し勝ちであった。昭43に子会社の役員に向向してから、ゴルフを覚え、私的なコンペにも出られる様になった。

昭46以前にも故田中卓次先輩(大15)を中心に神鋼電機の皆様、同窓会コンペをやつて居られた様であるが、昭47の志摩c.c.の時から中部支部のコンペとして実施された。途中二回位を除き略毎年出席した。そのせいか何となくゴルフ幹事になってしまった。抑々志摩でコンペをする事になったのは、故本多静雄先輩(大13)の恩恵によるものである。本多先輩並びに日本電話施設(株)が春の観桜会および秋の観月会を催しておられ、洛友会の人達も招待される様になった。観月会は会社の研修施設のある五ヶ所湾の七日島でや

つておられた。遠方から参加することで宿舎も手配して下さった。それでその翌日、ゴルフコンペをやつたらどうかという事になった。昭和47・49・50年は故田中先輩のお骨折りで、割安な志摩c.c.で実施した。ここはパー68で簡単そうに結構トリッキーなコースであった。アウトは海岸沿いのフラットなコースであるが風の影響が強く、逆にインは山岳コースで別の意味で難しい。崖下へ打ち下すショットがあり、調節が必要で大きくてOB、小さいと崖の途中でOBになる、メンタルなコースである。少し鳥羽寄りに、中部財界(名古屋鉄道が代表)で設立した鳥羽c.c.が出来たので、昭51より会場をこちらへ移した。このコースは海寄りの緩斜面を利用したものの、谷越えのホールが5ヶ所ありメンタルな厳しさがある。ここ

の売物は各ティーランドから、的矢湾が展望出来る事である。ここで8回実施したが1回は豪雨のため流会になった。人数は8〜12名でなかつた。これ迄の11回は洛友会や教室から1〜2名来賓として出席して下さった。大谷会長も優勝され、池上、長尾(現総長)並びに岡田教授も優勝しておられる。昭59から名古屋近辺で実施する事になり、外山先輩(昭22)や大野支部長(昭25)に会場の斡旋をして戴いた。また西尾先輩(昭23)の紹介で2回浜名湖c.c.へ出かけた。なお昭60から、本多大先輩から戴いたカップを争奪する本多

杯コンペになった。参加人員は12名を中心に7名から最大15名の時もあった。平成5年迄は自己申告ハンデにより、1〜3位のハンデをアップしていたが、平成6年よりダブルペリア方式に切替えた。優勝回数最多は、4回の倉知君(昭55)である。

### 洛友会が設立された昭和28年は新教育制度最初の卒業生中部支部の50年

前原 恒之 (昭28年新)

最後にになりましたが、洛友会の益々のご発展をお祈り致します。

前原恒之が社会に出た年で、私も名古屋に就職して50年になりました。中部支部の活動状況については、会計を担当した昭和48年以降は把握しているつもりですが、それ以前は、洛友会の設立から参画されて草創期の支部運営にも尽力された清水勤二氏、本多静雄氏、古田久一氏をはじめ諸先輩が故人となられた現在では乏しい資料からの推測になるのをお許しいただきたい。

中部支部の第1回総会は、昭和28年12月5日、名古屋ホテルで開催された。洛友会本部からは鳥養利三郎会長、阿部清先生、山村忠行幹事が来名されている。地区在住の洛友会員37名が出席、支部会則を承認し、初代支部長に清水勤二氏(大正12年卒業)を選出して、中部支部が誕生した。

当時、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、長野県在住の洛友会員は約120名であった。昭和39年1月11日、清水支部長が急逝され、第二代会支部長に本多静雄氏(大正13年卒業)が就任された。この時、鳥養利三郎会長から、中部支部報に次の文が寄せられた。「洛友会開設以来その副会長をかねて、本会のために大いに力をいたされた清水支部長の急逝を聞いた時には、私たちは呆然自失すると同時に、実のところ支部の将来にいささか懸念するものを感じたのであります。然し私は信ずるところがあり、必ず本多君が乗り出して新しい理想と企画をもって大いにやつて下さるに違いないと確信してまいりました。今、それが実現したことは、支部の為のみならず、洛友会にとつても誠に喜ばしいことであります。・・・」

ために篤志募金を呼びかけられ、この時集まった拠出金は、現在も支部活動の基盤となっている。昭和62年、本多支部長は卒寿を迎え辞意を表明されたため、大野彰氏（昭和25年卒業）が第三代の支部長に就任された。大野支部長も、支部活動に熱心に取組まれ、特に家族同伴秋の例会では支部長格別のご配慮により白川郷、大垣、伊勢、彦根長浜、高山、京都、郡上

## ●●中国支部●●

### 中国支部のご紹介

中国支部事務局

中国支部の概要をご紹介させていただきます。

#### (1) 中国支部の誕生

洛友会中国支部は、本部創立に遅れること約1年の昭和28年12月1日に発足しました。中国地方では、洛友会発足前から故鈴木貫一氏（昭42卒）を中心に折々に会合をもち、同窓会活動を行っていましたが、これが洛友会中国支部に発展した形となりました。

#### (2) 会員数の変遷

支部会員数は、発足当時80名強でしたが、その後着実に増え続け、特に昭和36年度からは電気講習所卒業生も加わることとなり、会員は一挙に100名を超えることとなりました。以降、毎年1〜2名ずつ新卒者が加わり増え続けました。近年は残念ながら新卒者も減

八幡、伊良湖、岩村、明智、谷波、香嵐溪、馬籠など数多の名所旧蹟を訪ねることができた。中国支部も今年50周年を迎え、会員数は40名を超えました。過去50年の支部の歴史は、三人の支部長の努力によって築かれてきました。これからは、若い会員の皆さんで、新しい支部の歴史を拓かれんことを念願しております。

り、会員のご逝去も増えたため減少傾向となり、平成15年2月時点では会員数119名となっております。

#### (3) 歴代支部長

中国支部は1人の方が長く支部長をされることが特徴です。初代は真田安夫氏（昭2卒）で支部発足から昭和59年まで30年余り支部長をされました。二代目は故松谷健一郎氏（昭16・12卒）で平成11年まで15年間支部長をされました。そして現支部長は池内浩一氏（昭28卒）となっております。

#### (4) 支部活動

中国支部では、例年次のような活動を行っています。

##### ・支部総会

5月中旬に総会を開催しています。定例議事（支部活動報告、会計決算、予算報告等）のほか、本部から1名、教室から1名をお招きして本部および大学の近況を伺っています。また、総会終了後に懇親会を実施しています。

##### ・企業見学会

平成13年から始まった新しい行事です。年1回秋頃に企業見学を実施しています。・ゴルフコンペ  
年1回、11月頃にゴルフコンペを行っています。平成14年で第7回となりました。

### 「もはや戦後ではない」から半世紀

秦 祐夫（昭30年卒）

戦後の飢えからようやく解放されて東通工（現ソニー）の雑音だらけだが世界初の市販トランジスタラジオや実験室で改造オッシロに写った青いテレビ画像に感激した学生時代が同時に洛友会の誕生のころで半世紀も前の事だとはどうしても思えないところが年齢を受容れたくない潜在意識よと自分のことを棚に上げた友人に笑われるようになってふと思えばもう21世紀。

その頃西部食堂で外食券の昼食をとりながら、憧れと反感のいりまじった想いでアメリカの繁栄を語り、あつという間に戦後を終わらせて驚異的な成長を遂げつつあるドイツ経済を論じたりしているうちに卒業就職。

黎明期にあった工作機械の自動制御にたつた一人で取組んでいるうちに研削盤の適応制御に熱中して機械学会賞を貰ったり世界で初めてのロータリーエンジン量産工場建設の総括を任されて夢中になっているうち

に、世の中は「貧乏人は麦を食え」となりふり構わぬ高度成長の挙句全地球的な大気汚染とオイルショックのダブルパンチ。

その頃自動車の電子制御分野に転進していた筆者達に重くのしかかったのは排気浄化と低燃費の同時充足という難題で、世界中の自動車メーカーがこぞって膨大な研究費を投じて得た実用的解決が8ビットCPUを使った電子燃料制御技術で、以来実現手段を持たないままに埋もれていた自動車技術上の様々な夢が新しく手にしたCPUという魔法の杖によって次々と実現していくことになった。

やがて80年代も半ばになると電子メーカーの提供する個別制御システムから自動車全体としての統合制御システムへの移行が叫ばれ自動車と電子の両エンジンやを糾合した組織作りが澎湃として起こり筆者もFMIN三社による強力組織作りを提唱し奔走したものである。

時恰も日米電子競争の頃で4メガDRAMをめぐって圧勝していた日本勢の中でも特許紛争をすべて蹴散らして強気な姿勢をとっていたN社がビッグ3の一角F社と手を結びかねない情勢にF社の電子エンジン制御を独占していたMO社が強い危機感を抱き社運を賭けての妨害工作にでたのは当然の成行きであった。

MO社の活動は凄まじく日刊紙の記事で米国技術の流出を嘆き週刊誌の広告でMO社技術のエンジン制御への貢献を訴え、中でもF社幹部へ

の働きかけは熾烈を極め遂にはオーナーをも動かすに至った。

水面下の実態はともかくとして表面上はFN両社社長（当時）の対談での行違いということでも処理されF社は撤退した。

忘れられないのはその時N社社長の「米国では失業率が4%でも問題ないが日本では1%でも大問題だ」との発言に対しF社社長がしてやったりと激怒してみせたことで、当時の世相と異り5%を越える現在の日本の失業率に今更乍ら今昔の感にたえない。

一方この成功に依存し時代に対応した開発態勢をとらず既得権を貪り続けたMO社は徐々に自動車ビジネスでの力を失って行くことになった。

F社の撤退に伴ってMN両社は規模を縮小しながらも当初目標通りジョイントベンチャーをたちあげカーエレクトロニクスに新風を吹き込んだが、それも後日かつて撤退したF社によって全面買収されることになった。

もはや時効になってしまった兵どもの夢の一齣ではあったが、一方その後の半導体業界のめまぐるしい変遷を見るにつけ、魔窟からの復興そしてひたすら成長と言った素朴な物作り屋の時代の終焉と利潤追求一辺倒時代の到来への空しさが胸をよぎる想いを禁じえない。

戦後の終焉と共に始まった私の50年はそのまま洛友会の50年と重なるものであったけれど、その間を律した単純でひたむきな行動規

範が今や色あせて感じるのは単なる老人の懐古思考に過ぎないだろうかと胸の中に反芻する今日この頃である。

「出身はどちらですか？」

細田 順弘 (昭40年卒)

ある講演会の後の、立食パーティーの席で。

「初めまして、Aと申します。M社に勤めております。よろしくお願ひします。」

「Bと申します。N社に勤めております。こちらこそよろしくお願ひします。」

「きょうの講演は面白かったですねー。日本の規制がタマネギだなんて、うまくたとえたもんでですよ。」

「法律、政省令から始まり、内規、行政指導まで七段階をタマネギに例えてましたね。講演者の憤慨ぶりがよく出てましたよ。」

と、きょうの講演会の話が二つ三つ続くと、話がとぎれます。そこでA氏は、B氏のコップにビールをつぎながら、話題を変えて、「ところで、急に暖かくなってきましたねー。この調子じゃ平和公園の桜も早く咲きそうですよ。」

「あ、どうも。しかし平和公園もですが、うちの桜も早く咲いてほしいですよ。」

「えっ?」  
「いや実は、去年も咲かなかったんですよ、『サクラチル』でね。」

が、今年はずいと思っているんですよ。」

「大学受験ですか。たいへんですねー。」と、いつとき子供供の受験の話になる。

初対面の人が、こうしてお互いあまり差し障りのない話から職業やプライベートまでいろんな話題を交わしながら親しくなっていく、というのが立食パーティーである。

「出身はどちらですか?」という質問である。聞く方に見れば、話の接ぎ穂にならなく聞いただけ、あるいは会話をしているうちに相手と自分との共通の接点を見つけてより親しみを覚えて聞いた、そんなところだろう。したがって、質問の中身をそんなに深く考えずに聞いている場合が多い。

一方、質問はきわめて簡明でありながら、聞かれている内容にはさまざまなものが含まれている。「お生まれはどちらですか?」「本籍はどちらですか?」「ご先祖はもととどちらですか?」「ご両親はどちらにお住まいですか?」「郷里はどちらですか?」

と、いろんな内容がある。それらの全部をひっくりめたおぼろげな感じで聞いている人もある。言葉の訛りを聞きとがめて出身を聞いたという人もある。気軽に聞く人は、多分、生まれも本籍もご先祖も一緒なんだろうと思う。

洛友会の皆さんは、生まれや本籍と現住所の異なる「全国区」で活躍されておられる方が多く、出

身を問われると少し考えてから答える、という人が多いのではなからうか。私の場合もまさにそれで、生まれは大阪、本籍は岡山、ご先祖は聞いているところでは奈良、両親は今ももういないが私といっしょに住んでいたところは兵庫、と全部違う。だから、単に『出身』を聞かれても、それによって何を聞きたいのか、何を知らたいのか、を確かめなくては答がでない。

そこで、私が出身地をきかれた場合は、「出身地をお尋ねですが、私の場合は『出身』の定義次第でいろいろな答えがありますので、まず、『出身』の定義をお教えください。」と反問することとなる。そういうことを質問者に質問すると、出身を何気なく聞いた人も、自分は本当は何を聞きたくて出身を尋ねたかを初めて考えるようである。中にはめんどくさくなつて、「とにかく一番長いこと過ごした土地のことですよ。」と無責任なことを言う人もいる。こうなると私の場合、広島であり、またまた違った答になるので困るのである。

これまでの経験から言えば、いろんな人がいろんな答をするが、だいたいで述べたような『出身』の定義の範囲内にあるようである。しかし、よく考えた末にでてきた答はほとんど、「現在の人格をかたちづくった青春時代、つまり小中学校を過ごした土地」という答のようだ。

日本の風景

古賀 隆治 (昭42年卒)

さて、皆さんの場合はどうでしょうか。

少子化が話題に上っており、我々の老後が心配です。私はこの4年間、岡山大学の留学生センター長を務めてきました。そこでは留学生を受け入れること他に、留学生の受け入れと派遣に関する予測・企画も一つの仕事です。日本の将来推計人口を調べてみると、2050年頃には労働者人口が現在の60%にまで下落するとあり、しかもそれはこれから毎年5万人ずつの外国人入国超過数を勘定に入れたうえでであるとのこと。この推移は極東の政治事情とそれに伴う日本政府の外国人受け入れ政策によって大きく左右されるはずで、この推計はかなり控えめなものとは思いました。

いろいろな不確定な要素がありますが、要するにそのころは、町中右を見ても左を見ても元気なのは外国人労働者ばかり、という風景が目に入るでしょう。何のことはない、現在の米国、ヨーロッパの情景そのものです。

仕事場ばかりでなく、生活の場にも新しく来日した人々がやってきます。これまで住んでいた老齢の日本人家庭が消え、代わりに外国人が入居してきます。最近こんなことを経験しました。中国から

来た留学生を連れて学内を案内していたとき、彼は建物の玄関の真ん前に自転車止めようとしてしまった。習慣が違うからと思って、「そこに止めたら他の人が通れなくなるから脇に置きなさい」と私は言いました。彼は怪訝な顔をして、「何処にそうしなさいと書いてありますか?」というのです。決して不真面目にはなく、真剣に聞いていました。日本人にとつてはそれは「言うまでもない」当たり前のことですが、中国では土地で気象も社会事情も違うので、いちいち命令が明示され、しかもそれに従わなければ即座に「罰金・ファークアン」が普通なのです。彼の目には何とも判りにくい、不明朗な社会と写ったことでしょう。

文化・文明の違う国から来て、そこで生活しようとするにはこのような障壁を乗り越える必要があります。この障壁をそのままにしておいては、また彼らにとつても魅力有る職場と生活の場とは見えず、ひいては優秀な人々を引きつける魅力を与えないことになり、結局は、我々老齢化社会が彼らの力を借りて存続することが困難になります。

日本の社会と文化は、確かにこの1500年ほどは世界から孤立して発達し、全く独自のものを作り上げたように見えます。しかし、よく考えれば、我々が使う言葉、文字、概念のほとんどが大陸より渡来したものであることは確かだ、

しかも我々の血そのものの中にも比較的最近に大陸より伝わったものが多いと推測されています。

今や、日本に住む人間集団が1500年の時を超えて再び大陸との混交を開始しようとしています。このような時期を間近にして、我々は大急ぎで準備が必要です。日本の社会構造を調整して、渡来した外国人が容易になじめるルールの作成が必要です。日本人の意識もこれにあわせて変える必要があります。例えば、「無言の了解は決して金ではなくあくまでも主張は明示的に言葉で発せられねばならない」という風に、今までの日本の常識を変える必要があります。耐え難くても耐えねばなりません。日本語自身も多少改変する必要がありますが出てくるでしょう。あるいは自然発生的な変化を容認せねばならないでしょう。過去にも、大陸からの大量の人口流入に伴って日本語の中に関西弁という異質な言語が発生しました。これが良い例だと思います。

それと、渡来したばかりの外国人に、「日本の社会は尊重すべきで、軽々しくは損壊してはならないものである」ことを直感的に理解してもらうためには町の景観を整える必要があるでしょう。町中が蜘蛛の巣のような電線に埋もれているようでは話になりません。今ちようどブロードバンド革命の真っ最中ですがこの機を逃さず電線の地中化を進めてほしいものです。これは我々電気屋の仕事です。

### 九州支部

#### 洛友会九州支部の思い出

上田 保之 (昭27年卒)

洛友会が昨年11月創立50周年を迎えました事を心からお祝い申し上げます。記録によりますと、九州支部の創立総会は翌年の10月26日に開催されておりますので、九州支部も今年は50周年を迎えることとなります。

洛友会の初代の会長鳥養利三郎先生は昭和27年から28年にかけて、関西・中国・四国・九州地区のロータリー・クラブのガバナーに就任しておられました。この間しばしば九州にお出かけになる機会も多かったようです。ロータリー日本五十年史によりますと、昭和27年11月15日の地区年次大会および昭和28年2月22日の近隣都市一般討論会が九州電力の本店が入居しておりました福岡市の電気ビルで開催され、先生はガバナーとしての重責を果たされております。その際、先生を囲んで福岡在住の同窓生との昼食会が開催されました。2月22日は九州支部結成の前でしたが、私も参加する機会を得ました。洛友会創立の直後でもあり、先生からは九州支部の設立の要請と同窓会のあり方について卒業年度、職歴などに関係なく全員全員が一つ心で会の運営にあたり、人格の陶冶に当たって欲しい

とのお話があり、今でも良く記憶しております。先生のお話はロータリーで言うクラブ奉仕や職業奉仕の考え方と同じではないでしょうか。ロータリークラブは2005年2月には創立100周年を迎えることとなります。洛友会もますます発展し、21世紀に卒業された方々が中心となって、盛大な100周年を迎えられることを期待しております。

私は平成元年から8年までの7年間6代目の支部長を務めさせて頂きました。九州支部総会時の運営方法として、鳥養先生のお話の趣旨に沿いたいと考え、誰とでも遠慮なく自由に会話が出来るように、会食前にカクテルパーティーを開催することにし、特定の会員からの話題の提供もして戴きました。この方式は定着し、今も好評を得ております。

の昼食会は現在も継続しており、毎回思いがけない話題も飛び出し、親睦を深めております。

大正14年と15年の卒業生の同窓会は後年14日会となり、毎年全国各地で盛大に開催されておりました。昭和38年には九州の別府・阿蘇・雲仙で4日間開催された時には、九州電力の宮田常務取締役が幹事役で親身になってお世話しておられました。ご指示もあり、私も後輩としてお世話させて頂きましたが、電力、電機業界などで活躍しておられた方々のお話から多くの事を学びました。最新の洛友会名簿では、14日会の会員で住居の明らかな方はお一人になったようです。

私の支部長最後の年度に、加藤勝彦幹事(昭和41年卒)のご尽力により、九州支部の活性化に関するアンケートを実施し、50名近い方々から回答を戴きました。その際のご意見、ご要望には、①懇親旅行(1泊)をやってはどうか ②ゴルフや登山など屋内の趣味の会、囲碁や麻雀など屋外の趣味の会を年1回してはどうか ③電気工学科以外の学科の卒業生との合同の同窓会を開催したら ④あれもこれと行事を多くせず充実したイベントを希望する。⑤福岡以外で見学会を兼ねて昼食会を実施したら ⑥昼食会は勤務の都合もあり土曜日を希望する。⑦インターネットを活用して情報交換を

らはその後の九州支部の運用に活かされております。

九州支部発足時の支部会員数は80名程度であったと言われており、その後漸増し、平成になりましてから三桁になったと思いますが、現在は数年前から115名程度に留まっております。21世紀の外交や経済がアジアに軸足を置いた政策に転換せざるを得なくなれば、九州が日本の玄関口になるでしょう。洛友会会員の九州での比重が高くなればと期待しています。

この原稿を作成中の2月24日に、九州支部初期に幹事、評議員として活躍され、支部の発展に貢献された昭和11年ご卒業の加来誠一郎先輩が90歳の天寿を全うされたとの訃報に接しました。ご葬儀には九州支部を代表して参列し、ご冥福を心からお祈りいたしました。

#### 洛友会九州支部50年の歩み

徳永 勉 (昭51年卒)

洛友会設立50周年を記念した今回の特別企画は、九州支部のこれまでの歩みを取りまとめるまたとない機会となりました。しかしながら、いざ作業に取り掛かりますと、現在事務局の記録として確認できるのは昭和50年代以降で、それも一部欠落している時期もありました。そのような訳で、九州支部設立から昭和40年代の歩みにつ





れたりするまだまだ不安定な時期でした。建設部に配属され幾つかの新設水力の計画、施工に関係し無闇に忙しい日々でしたが会場が職場と同じビル内で平日昼間だったので駆り出され末席に座っていました。もちろん最若輩の部類です。当時金沢、福井両大学の教官に何人も同窓生がおられ会社では佐伯光太郎常任監査役(大10年卒)荒井武治工務部長(大12年卒)金井久兵衛副社長(昭5年卒)等の方々が最先輩でした。

随分前になりますが今でもありと記憶に残ることが二つあります。その第一は総会の行事が終わり懇談に移り大学でもう少し当座の役に立つ実用的具体的な事も教えてはとの話題になった時です。鳥養先生があらたまった様子で大学における基礎教育とその課程における知的訓練の重要性を力説されいささか座も白ける位でした。工業技術は日進月歩だしその為の大学だから旧制から新制になっても全く考えは変わらない、基礎が身につければどのような分野でも何時になっても世の中のお役に立てるとの至極当然なお話でした。まことに説得力に充ちた精悍な感じで一回生の時ほどく難解だった積分表示の電磁気学の先生の講義を思い出しました。その頃軍機扱いが解除になって多数の図書が出版された古典的制御論が身近になり演算子法に似て非なる伝達関数等に基礎学力の欠如を充分自覚していましたから身につ

まされる思いでした。50年の間に私が見聞した範囲でも様々な工業製品やシステムが出現し消えてゆきました。水銀整流器、カップリレー、PCB絶縁油、油入や空気遮断器、真空管磁気回転増幅器、接点形調節器、交流計算盤、アナログ計算機等々ハード、ソフトを合わせ枚挙に暇が無いほどです。またここ20年ほどは高効率ガスタービン、石炭の加圧燃焼や二次電池、燃料電池、高温超伝導等への過剰な期待に対し願望と予測を客観冷静に識別対応する必要がありました。何時になっても広く堅固な基礎知識、学力が要望される所以です。

その後昭和42年に鳥養先生が林重憲先生とご一緒に北陸へお見えになり荒井支部長のお供をして金沢、安宅、那谷(なた)寺を案内し兼六園の三好庵で昼食、山中温泉や宿の女将達と交わされる洒落な会話を呆然と聞き惚れていたのを思い出します。

外感があつたかも知れませんが北陸電力の本社は富山市で九電力では例外的に供給地域の最大都市でも地理中心でもありません。有利な水力地点が富山、岐阜北部に多くその安価な電力を求めて昭和初期から需要も富山県に集中して置いたから電力の管理中枢を富山に置くのは当時の状況では至極当然でしたがそれだけに石川、福井に細心の配慮が必要だったのでしよう。後年火力、原子力の立地に関るようになって出先で剣突くを食らい厭味を聞くたびに思い起すことがよくありました。

富山、石川、福井県内に在住する者を会員として設立しました。設立のきっかけは、昭和28年末に加藤信義先生が北陸御出張の際、北陸支部結成につき先生からお誘いがあり、また同窓生の間でもその希望が強かったため、支部結成の動きが具体化し、翌年5月に鳥養先生(当時会長)がたまたま北陸にご来訪されるのを機に、設立することとなったのです。設立総会は、本部から鳥養会長他をお迎えし、富山市の電気ビルにおいて会員37名中25名が出席し開催され、初代支部長には高木金生氏が選ばれました。

その後、以下のように数年に1回総会を開催し、会員の親睦を深めてきております。歴代支部長は8名で、それぞれ北陸地域の産業界又は学界のリーダーとして活躍されてきた方々ばかりです。現支部長の中島恭一氏は富山県立大学学長として、富山県における科学技術の振興を支えようと、最先端分野の教育研究を通し高度な技術開発力を持つ人材の育成を推進しています。支部会員数も徐々に増えてきて現在83名(平成13年4月現在)を超える所帯となりました。県別にみますと、富山39名、石川24名、福井20名となっています。主として電力関係、大学・高等専門学校教員、電気機器メーカーなどで活躍しています。卒業年次別では、次表のとおりです。

昭和1桁台	2
昭和10年代	5
昭和20年代	11
昭和30年代	4
昭和40年代	17
昭和50年代	19
昭和60年代	6
平成	19
計	83

このような同窓会組織は、仕事を離れ上司・部下の関係もなく年代を超えて気兼ねなく語り合うことができ、かつ当支部のような地方組織においては、皆が北陸地域の発展のために日々努力しているという共通意識も芽生えることと考えます。

今後若年層から第一線を退いた方々までも歩んでいける洛友会の末永い発展をお祈りいたします。

**洛友会北陸支部の活動状況**

鳥村 孝一 (昭61年卒)

洛友会設立50周年おめでとうございます。北陸支部は本部の設立に約2年遅れて、昭和29年5月に

開催日	場所	支部長
昭和29年5月6日	富山市 電気ビル	高木 金生
昭和35年7月13日	富山市 奥田屋	長井 要蔵 (大正5年卒)
昭和36年5月30日	富山市 奥田屋	〃
昭和39年6月16日	富山市 金茶寮	荒井 武治 (大正12年卒)
昭和42年7月8日	富山市 海老亭	〃
昭和44年8月6日	富山市 海老亭	〃
昭和51年6月19日	金沢市 金城楼	〃
昭和55年11月18日	富山市 松月	西岡 敬二 (昭和7年卒)
昭和59年5月26日	金沢市 ホリディイン金沢	〃
昭和62年6月27日	金沢市 石亭	野村 精二 (昭和24年卒)
平成3年5月25日	富山市 松月	〃
平成5年4月17日	富山市 銀鱗	川端 昭 (昭和28年卒)
平成7年6月10日	富山市 神通荘	〃
平成8年6月15日	富山市 川柳	西村 高和 (昭和23年卒)
平成10年6月13日	金沢市 松魚亭	〃
平成11年6月5日	福井市 ホテルニューユアーズ	中島 恭一 (昭和40年卒)
平成13年4月7日	富山市 五万石	〃

## ●●東北支部●●

### 東北支部の歩み

支部長 大家 寛 (昭34年卒)

#### 平井支部長の時代

東北支部の結成は昭和41年6月11日の設立総会においてなされた。本部より鳥養会長、林副会長が出席され洛友会としては最新の支部として平井寛一東北電力社長を選出して、支部会員30名をもって出発している。二村忠元東北大学教授、三国文治郎東北電力調査役、三上謹五東北電力秋田支店発電変電課長、安達哲夫東北電気通信局長が幹事として名を連ねておられた。この支部を支える大きな存在は平井支部長で、後に東北電力会長となられたが、東北経済連合会会長として東北経済界を統一し、文字通り東北経済界の巨星であった。

私事、平井支部長に初めてお会いさせていただいたのは、昭和51年6月12日の第11回東北支部総会の折りであった。東北大学赴任後当方の不手際で2年も経過しての出席であったが、「やつと来ましてね」とカリスマ的な奥深さの中から、優しい言葉をかけて頂いて、同窓会のありがたさと東北の地へ来たことを、改めて良かったと思った。これから、東北が故の問題などの解決策を、種々お教え願おうと感じた事を思い出す。しかし、平井会長はこの年の総会を最後に病の床に伏され、昭和52年1月お

亡くなりになった。

平井会長はお生まれ育ちとも京都であったが、黒部第四発電所所長をはじめ、電力関係の重要拠点の首長を歴任され、東北の地に骨を埋める決意で、関西電力副社長を辞し、東北電力社長となられた。東北電力ではもとより、東北経済界にあっても牽引役を果たされ、ご逝去の折には、各誌に哀悼が伝えられた。特に河北新報には、ご逝去に対する深い哀悼とともに、同会長の東北経済の振興への働きを高く讃える記事が掲載された。

#### 二村支部長の時代

昭和53年6月に開かれた第13回東北支部総会で、二村忠元、東北大学教授が支部長に選出され、同時に、三国、内山、安藤の各幹事が選出された。平井支部長時代に確立された支部運営の柱として、爾来幹事は継続して東北電力所属の支部会員から必ず一名はご苦労願うことになっている。

この時期に毎年一度もたれる総会は、二村先生のお人柄で力づけられるものであった、先生は大変お話し好きで、話が始めると、止まるところを知らないという感じであった。東北大学で開発された磁気テープの垂直記録方式のこととか、特にご自身の専門である雑音の研究に関しては都市騒音の深刻さ、に取り組んでおられ、わが国において騒音問題をこのまま野放ししておけば近い将来人々は都市に住めなくなることを予言され、各方面で、騒音対策の重要任務を果

たされていた。

東北支部総会に際し支部が重要に考えていることの一つに、本部との密接な関係がある。この点では本部から教授の先生方の出席を頂き、特別講演を依頼するのがこの時期の慣行であった。例えば木嶋先生の「グラフについて」(第12回)、田中哲郎先生の「光通信ならびにその材料」(第13回)、近藤先生の「先端技術と貿易摩擦」(第17回)、などで、田中先生の用意されたMaterial and Devices for Optical Communicationという資料からも思い出される様に、各先生から格調高いお話をいただいて

学生時代の講義の時をそのまま再現するような先生方のきちっとしたお姿と講演の内容は支部会員一同にとって深い感銘の時であった。その他にも上之園先生、池上先生等々同じく優れたお話があったが、紙面の都合で割愛をお許し頂かねばならない。

二村先生にも私事ながら、東北大学の問題を含めお教え願えることを喜びにしていたにもかかわらず、そして支部会員一同支部の牽引役として大いにお頼りしていたにもかかわらず、先生は昭和57年12月平井会長が運動の先頭にたち、東北の人々が待ち望んだ東北新幹線の、当時の始発駅だった大宮駅のエスカレーターに足をかけられたまま急逝された。まことに残念なことであった。

#### 三国・三上支部長の時代

昭和58年6月の第18回総会で三

国文次郎東北電気保安協会理事長が東北支部長として選出され、伊藤貴康(東北大学教授) 松山隆司(東北大学助教授) 秋山康人(東北電力(株))の各幹事をもって第三代支部長の時代が始められた。この総会には本部からは洛友会会長・松田先生が川端教授ならびに洛友会幹事共々ご出席頂いている。

東北支部はその会員30名前後の小支部であるが、総会出席者はさらに縮小されていて常に10名前後となっている。通常同窓会では出席率50パーセント前後となっているのと、異なっている背景には東北支部には新潟地区在住会員がおり、異なることに関わっている。三国支部長はこの新潟地区在住会員のことを深くご心配になり、常に仙台で開催されてきた総会を新潟市でも一定の割合で開くことを提案された。昭和62年6月の総会は新潟市にて開催され、仙台・新潟間直行の航空便を利用し一同新潟東急インで思い出深い総会をもった。しかしその頃から全体に多忙な時代に突入し、会員の時間的余裕が制限され、この問題は完全に解決されず持ち越され、課題となつて残されている。

昭和63年、23回総会において、三上謹五・東北発電工学常務取締役が第四代東北支部支部長に選出され、井上、秋山両幹事となった。この時期も年一度の支部総会が主たる行事であるが、本部から大谷先生はじめ、諸先生にご出席いただいている。特に近藤先生には回

を重ねてご出席いただき、この時期急を告げた、大学改革特に、大学院の部局化にかかわる京都大学の変革など、詳細に説明頂き離れている母校への思いを新たにされた。私事、仙台にて、専門分野の国際学会を主催させて頂いたのであるが、東北支部の絆によって、東北電力からも過分のご寄付を頂いたのは平成6年のことであった。

#### 平成8年以降(現支部長の時代)

東北支部の規模は発足以来30年間ほとんど変わらず会員数30名前後の線で推移してきた。東北の地に京都大学電気系の卒業者が就職することも東北大学、東北電力を除くと一層稀であるが、しかし、京都大学に学んだ青春の一時期の思いを共有する同窓として絆の尊さを思い最近総会ごとに、本部からお出でいただく先生の母校の近況報告の後に、支部会員各出席者全員から一年間の活動報告を中心にお話頂くのと同時に、一人ないしお二人から講演をしていただいている。それぞれことなる世界、社会、会社の状況が改めて認識される中に互いに励まし合えるものがある。

近藤先生には、昨今、支部運営が必ずしも順調で無く多々ご迷惑をおかけする状況にありながら、常に東北支部のために総会にご出席ご尽力いただいている。特に会員数の点で、弱体化の懸念あるこの支部で、会員の絆を先生が強めて下さっていることなど、この場をお借りして深謝する次第である。

### 東北支部の思い出

井上 茂 (昭48年卒)

早いもので私が洛友会東北支部に入りもうすぐ30年が経とうかとしております。もともと東京出身の私ですが、東京に戻るのが嫌で、仙台に本社のある東北電力に就職したのが、東北支部との縁の始まりでした。当時、東北電力への新人は18年ぶり、早速、先輩から声がかかり6月の支部総会に出席しました。同窓会という、先輩・後輩が肩を組み乱れ飲む宴会を想像していたのですが、洋食のテーブルで、当時の支部長であった平井寛一郎東北電力会長の取り仕切りの下に、本部派遣の田中先生の学校状況報告、学術講演、そして懇談が、厳肅な雰囲気の下で行われたのに面食らったのを覚えております。しかし、新入社員にとって雲の上の人である自社の会長の話を近しく聞け、また声もかけていただいたことで、洛友会員であることに感謝したのを憶えております。

その後、支部幹事を務める機会が多くありますが、近藤先生、大谷先生、上之園先生など、学生時代には恐れ多く口も聞けなかった先生方と、若いうちから直接にお話が出る機会を数多く持てたのは、役得だったと思っております。東北支部の会員は、東北電力関係者、東北大学を中心とした大学関係者、官庁や旧公社系企業などの

### 北海道支部の50年

支部長 芝山 龍一 (昭28年卒)

#### 1. 支部設立当時の思い出

昭和29年8月3日、加藤信義先生が札幌に見えて、北海道支部設立のお勧めがあった。

同年10月10日、北海道支部設立総会には、大塚徳雄 (大6) 小田部毅 (大7) 片山辰雄 (大7) 橋本篤四郎 (昭2) 副島敏夫 (昭13) 生田努 (昭14) 森田英男 (昭17) 池内義則 (昭21) 坂入吉彦 (昭28) 芝山龍一 (昭28) の10名が出席して発足した。

初めての総会は、橋本氏から和やかにやろうとの提案支援により、札幌市内から離れ石狩川河口の「扇屋」へ、此処で北海道の秋の味覚「石狩鍋」を味わいながら

異動で東北に来る方、東北の企業の方に大きく分けられます。しかし残念ながら、本来牽引役となるべき東北電力については、私の後は11年後、16年後に2人が入社しているだけで、現在は現役3名となり、東北大学についても大家寛先生に続いて伊藤貴康先生が退官されるなど変化がでております。最近の支部総会については、出席者が固定化してきていますが、その分、大家支部長の工夫で、話題を企画し盛り上げているところで、東北支部会員数の伸び悩みに

は、東京方面への一極集中化がさらに進んでいること、東北へのIT関連企業進出が少ないこと、製造業の空洞化など、厳しい現実が裏にあるのかもしれない。

私の入学時 (昭和44年) 京都大学工学部電気系教室への東北地方からの入学者は山形県からの1名でしたが、高校生の息子に聞くと最近では京都大学を志望する者も結構いるし、工学部の人気も高いとのこと。若い会員を心待ちにし、東北支部を維持発展させたいと願っております。

夫先生、林宗明先生が夫々大学の特別講義の機会に。平成4年には別件 (クラス会) で来道の大谷泰之会長と同行の藤田茂夫先生をお迎えしてお話を承り、懇談できたことは特に印象に残る会合であった。これからも何か別用で京都から来道の節は、ご一報下さるようお願いいたします。直ぐに集まりやすいのが、少人数のメリットです。以上のように総会での懇談を通じて、情報交換と親交を深めることが主な活動であった。

盛り上がったところで、会則、役員を決め、初代支部長には大塚徳雄氏に就任していただいた。

翌年の春には、支笏湖へ遠路のドライブ。当時、自家用車の無かった中で副島氏が車を工面されたので、多数の家族も加わり総員15名に達した。今振り返ると、この時が最多数の集まりであった。こうして会員相互の協力により親睦を深めつつスタート出来た。

上記10名の他に山上孝 (大14) 侯野麻太郎 (大14) 師尾守泰 (昭17) 等を含め当初の会員合計は17名であった。

50年を経て、北海道支部会員として現存するのは、池内、芝山の2名のみとなった。

4. 支部会員の状況

支部会員数は昭29年当初、前記の通り17名であって、以後昭和56年頃までは16、21名で推移してきました。このうち最多数の昭52年21名の構成をみると、北海道に2、数年で転勤される会員が6名を数えたことは、支部として大歓迎でした。当時は、旧呼称も交え国鉄、電電公社、新日鉄、各種の官庁や企業では、北海道への人材異動が行われていたが、経済情勢など諸般の変化に伴い、同窓の異動会員が少なくなる傾向がみられるようになった。また地元の北海道電力 (株) への入社も仲々続き難く、増えない要因の一つであろう。この結果、平成元年以降、同14年現在に至るまでは15名前後となっている。

2. 歴代の支部長

初代：昭29、31、大塚徳雄 (大6)。発足時最年長、高校長に在任中、初代としてご尽力。副支部長として橋本篤四郎 (昭30死去)。

3. 支部活動の推移

支部発足から洛友会30周年までの間では、支部総会の集まりは5回、平均して約2年に1回、開催してきたが、その後の14年間の昨年までは15回、即ち1年に1回の割合で開いてきた。

昨今は毎年ゴールデンウィーク明けの開催が定着してきた。少人数につき、大きい1テーブルを囲んで、半世紀以上もの年代差を越える今昔の話を味わいながらの歓談が楽しみ。

これまで京都から来道された機会に、支部会員と懇談頂いた実績が3回あった。昭50年代に津田孝

現在の内訳は大学関係3名、北海道電力関係7名、その他6名 (うち医師1)。このような少数人数であるので、新しく北海道に来られた方も、早く馴染んでもらえる

### ●●●電気講習所●●●

#### 電気工学講習所の沿革

神戸 俊夫 (昭14年講卒)

洛友会創立50周年を迎えおめでとうございます。電気工学講習所(以下講習所)の沿革については洛友会創立30周年史に、講大5年立石亨三氏が詳しく述べられているので、講習所の創立から廃校、その後の経過を報告します。

一、講習所創立から廃校まで

青柳栄司先生が電気事業発展のため講習所(始めは私立電気講習会)となつていますが、講習所に統一します)を設立されました。青柳先生には講習所の設立には大変ご尽力され、澤柳総長のご理解と電気教室の先生、他学部先生方のご賛同を得て、修業年限2年、夜間授業、入学資格中卒、入学試験なし、科目制、で大正3年1月から電気教室の講義室で、最初の講義が行われた。授業は口述が主で、生徒達はノートを盗るのに必死であった。青柳先生は能筆家で、講習所の同窓会で出席者によく色紙を贈られていた。

北海道に戻り苦勞されたが、薬品の管理・流通に情報システムを、業界に先駆けて導入し成果をあげられた。支部総会の懇親では、苦心談など異色の話を傾聴できるのが楽しみであったが、残念ながら平成12年に亡くなられた。

青柳先生は授業中に、講義を中断されて、道徳教育の大切さを述べられて、「特に智、情、意」の三美具であった。洛友会報130号に青柳先生が「三美具」について詳しく説明されているのでご参照されたい。



関野弥三先生は講習所野事務と磁気測定の話を担当されていた。先生は地方出身者の昼間の就職を、電気教室関係の研究所、研究室の研究補助に斡旋、そつぎようせいの就職等を世話されていた。この仕事を大正3年1月から、昭和15年3月までの26年間続けた。

第一回卒業生37名は大正4年10月15日に卒業され、卒業証書は写真とされた。校名が私立電気工学講習会となつているが、3年後に、校名を電気工学講習所に変更



関野弥三先生

関野弥三先生略歴  
 新潟県e田市出身  
 明治9年10月生 市立東京物理学校入学生  
 29年10月 同校卒業  
 31年10月 東京帝国大学 理工学部助手  
 33年8月8日 全上工学部講師  
 昭和7年2月5日 同上退職  
 15年3月

されてはいる。校舎も電気教室のポーチから西北に離れた処に、木造平屋建ての階段教室が建設された。その後、学生の増加に伴い、情報工学科教室のあるあたりに、2階建ての校舎を竣工と同時にこれを大学の寄附し、講習所と共用することになった。後に3階建に増築された。昭和2年10月から修業年限6ヶ月の補修科が設けられたが、昭和6年に打ち切れ、以後は入学10月1日、修業年限2年半、卒業3月となった。昭5年卒、清水寿栄次氏が洛友デルタ会短信集に投稿された、卒業式の式次第と、卒業証書を拝見すると、一私立学校の卒業式に京都大学総長、工学部部長が祝辞を読まれる事は、特別な関係があるのしか考えられない。やはり青柳先生のお陰かと思われ

講習所が立命館に正式移行の許



第一回卒業生の卒業證書

可書は、文部省より昭和13年2月21日発令された。これで私立電気工学講習所は廃校となった。

講習所の昭和14年、昭和15年、卒業予定の学生の授業は、従来通りの授業内容で行われた。

機械工学科より、原動機の講義をされていた、桜井先生の京城高工へ赴任の送別記念写真に、多くの先生方と共に無くなった校舎を背景にした記念写真に、列席出来た事は好運であった。

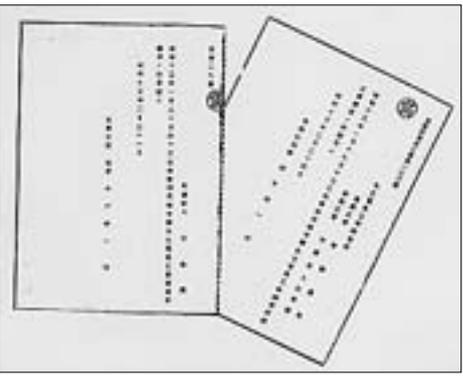
講習所も昭和15年度の卒業生が最終となった。青柳先生の教育方針として、智、情、意、を基本にした「三美具」の話を講義を中断して在校生に教育された。

「三美具」の説明は洛友会報130号青柳先生が詳細に説明されているのでご参照されたい。

昭和59年3月26日に情報工学科の教室の一隅に電気工業講習所の記念碑の設立の際に、話をされてきた「三、美、具、」の先生揮毫



(写真上) 講習所校舎前で京城高工に赴任される桜井忠一先生の送別記念に。前列向かって右4人目より清野・井上・羽村・青柳・本野・桜井・関野各先生方と在校生(昭和14年卒業)。昭和13年6月5日写。



の文字が彫られている。この記念碑については洛友会報127号の拙文を参照されたい。大正3年1月から、昭和15年3月までの26年間に、1278名の

学位取得者

No	卒業年度	学位	氏名
1	大7	理学	中山 豊吉
2	大11	工学	高野市太郎
3	大14	〃	山崎惣三郎
4	昭9	工・理	三好 保憲
5	〃10	工学	近藤 敬吉
6	〃11	〃	岩本 国三
7	〃11	〃	奥田 一郎
8	〃13	〃	市川亀久弥

卒業生を各種学校のため、卒業時の資格はなかった。学生は良い環境と、最高学府の戦死が多々野講義をノートに取りながら勉学に熱心であった。在校中、卒業後に電気主任技術者一種(大卒)、二種(高工卒)、実業学校教育資格等の試験に多数合格者を出した。

学位取得者も別紙の様に8名の方が取得された。

講習所の事務的な仕事と、磁気



昭和44年6月1日 関野先生七回忌於南禅寺天授庵  
前列2列左より9人目上西、鳥養先生、1人置いて関野夫人大谷、近藤先生

測定法の講義を担当された、関野弥三先生は又、創立から廃校までの26年間に亘り学生の世話をされた。卒業生からも慈父の様に慕われていた。昭和44年6月1日に卒業生主催による、先生の七回忌の法要を南禅寺、天授庵にて行われた。出席者は来賓に鳥養、上西、大谷、近藤先生、講習所の出席者は第一回から最終卒業生までの92名でありました。

関野先生の十七回忌の法要を融資者の手により昭和56年7月12日に弘安山、無学寺で営まれた。出

洛友デルタの歩み

神戸 俊夫(昭14講卒)

席者は31名であった。

平成6年9月4日に開催された第10回洛友デルタ会総会の前に、関野先生の法要を弘安山、無学寺で行われた。出席者は22名であった。関野せんせいのご家族は亡くなられていたの、我々が集まった時に、法要を行っている次第です。

電気工学講習所(以下講習所とする)は昭和13年2月21日をもって立命館へ移管された。講習所は廃校となり、昭和13年度、14年度の卒業生を含めて、全卒業生は1278名となり今後の増加は認められない。講習所の同窓会は京都を中心とした、小規模な会合であった。全国的にすることで、皆の意見が一致したので、名称を洛友デルタ会としえ創立する事になった。代表は立石亨三氏、幹事長は最後まで見ること、最終卒業年度の卒業生から選出、幹事は各卒業年度から選出する。また幹事の中から会計幹事を選ぶことになった。第一回総会は昭和52年5月28日に洛友デルタ会の発会式が京都大学電気総合館で行われた。会場の借用は、近藤先生のご尽力に依るものである。立石代表より、説明、上野幹事長から経過報告があり、近藤先生から祝辞を頂いた。総会には全国から集まり、盛大に発会を終了することができた。総

会には毎回、大学の先生方の講演をお聞きして、頭の中を新たにすることにした。今回は木嶋先生の「電気と数学」のお話であった。会場をサンフラワーに移して、懇親会となった。出席者93名

総会の開催は隔年にする事になった。講習所が廃校になってから早くも62年が経過している。会員の高齢化が進み、回を開催する度に出席者が減るので、第10回の総会と講習所80年記念と、併用して

開催したが出席者は22名となったので、以後の開催を中止している。平成15年1月1日現在の会員数は74名となった。

年齢構成は95才以上11名、94才(90才)が17名、89才(85才)が32名、84才(80才)が11名となっている。平均年齢は87.7才、本年に白寿を迎える人は5名、米寿を迎える人は9名となった。以上がデルタ会の現況報告です。

	日時	場所	演題	講師
1回	昭52.5.28	京大電気総合館	電気と数学	木嶋 昭先生
	出席者 93名			
2回	昭53.11.4	犬山ホテル	ナシ	ナシ
	出席者 71名			
3回	昭55.7.5	宇治	ヘオトロン核融合の研究について	飯吉厚夫先生
	出席者 88名	花屋敷	電離層の研究について	加藤 進先生
4回	昭57.9.25	京大電気総合館	電気教室新館及び近況について	近藤文治先生
	出席者 98名	石長松菊園	電子工学からイオン工学へ	高木俊宜先生
5回	昭59.9.15	近畿地方発明センター	京都大学に於ける40年の生活	近藤文治先生
	出席者 67名	石長松菊園		
6回	昭61.9.14	近畿地方発明センター	センサと電子材料	川端 昭先生
	出席者 51名	石長松菊園		
7回	昭和63.9.18	近畿地方発明センター	人類の未来を託すプラズマ	坂谷良平先生
	出席者 49名	石長松菊園		
8回	平2.10.9	近畿地方発明センター	超伝導技術の最新の動向	
	出席者 44名			
9回	平.4.9.6	近畿地方発明センター	地球環境の現状と未来	西川偉一先生
	出席者 32名	石長松菊園		
10回	平成6.9.4	石長松菊園	ナシ	ナシ
	出席者 22名			
デルタ会有志の会		アビカルイン京都	来賓近藤文治先生	
	出席者 10名			

教室だより

平成14年度電気電子工学系進学・就職状況

電気電子工学科長 奥村 浩士  
電気工学専攻長 萩原 朋道  
電子物性工学専攻長 野田 進

平成14年度の就職の世話は学科

長、2専攻長が電気工学専攻と電子物性工学専攻長の大学院修士2回生、また学部学生もこの3名で行いましたが、情報学研究科の主として通信情報システム専攻の小野寺専攻長とも連絡をとりながら対処しました。

この不況にも関わらず、電気系には4百社を上回る求人依頼があり、当電気電子工学の出身者が企

業で活躍を期待されております。電気系以外の企業からの求人が多かったことも事実です。これらの企業の期待に応える学生・院生を育成していく大学側の責務の重さを痛感しております。

さて、今年度の特徴は総合電機メーカーの人氣が相対的に落ち、自動車企業の人氣が高く、時代を反映しております。大樹がなく、なつていく時代に大樹の影に寄ることの空しさを学生・院生が彼ら独特の若い感覚でキャッチしているように感じます。電気系教室では伝統的に推薦枠を設けて推薦をおこなってきていますので、今年度もそれを踏襲して推薦枠を設けました。しかし、応募したい学生・院生と面接し、志望企業に入社したい強固な意志をもち、かつその会社にふさわしいと判断した学生には枠を越えて推薦状を出すこともありました。企業の方で面接をしていただいて、その結果

不採用になっても、学生自身の責任であるとの了解をとり推薦をいたしました。事実、推薦しても面接で不採用になった学生もかなりあります。推薦状も形式的になりつつあるというのが実感です。学生の方も多様化し、自分が希望する会社の応募動機を明快に説明できる学生がいるかと思えば、何を指して就職するのかがもうひとつ明確に説明できない学生もいました。採用が内定しても「この学生さんは電気回路の単位をとっていないから、入社するまえに回路の勉強するよう伝えてほしい」との注文を付ける企業もありました。また、「分布定数回路がわかってる学生が欲しい」、「回路設計に興味のない人はいりません」など初めから学生・院生の専門性を指定する企業もありました。昔のように、京大電気卒業者ならだれでもよいというわけにはいなくなつてまいりました。

企業によって、推薦制のみ、自由応募のみ、両者併用など企業の特徴が出て参りましたが、両者併用の企業にはどちらかにしていたり、自由応募で、こちらの手を煩わせることなく内定をとる学生もおりましたが、多くは推薦を希望しました。

全体的に見て、電気系学生の就職希望者の就職率は高くほぼ100%にはなりました。平成14年度の学部卒業生数、修士課程修了者数と進学状況ならびに就職企業名を表で示しておきます。

	電気	物性	情報	エネルギー
官公庁	2			
電気関連	7	21	26	6
通信	2		3	
電気・ガス	5	2	2	4
機械自動車・化学等	6	4	3	3
鉄道				
放送・新聞			1	
コンピュータ関連				
金融商社等			2	
未定・研究生・帰国	1	2	1	1
計	23	29	38	14

### 松波弘之先生退官記念行事のお知らせ

松波弘之教授(電子工学科昭和37年卒)におかれましては、平成15年3月31日付で停年退官されました。左記の通り退官記念行事が行われますのでご案内いたします。

日時 平成15年6月15日(日) 午後3時より7時まで  
場所 ウェスティン都ホテル 西館四階「瑞穂の間」  
〒605-0052 京都市東山区三条蹴上 電話 075-771-7111

第一部 記念シンポジウム「シリコンカーバイド・パワー技術」  
第二部 記念パーティ(午後5時より)  
連絡先 〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学工学研究科電子物性工学専攻  
木本恒暢(Tel: 075-753-5341, Email: kmoto@kueekyoto-u)

### 平成14年度卒業生進学就職状況

工学研究科(電気工学、電子物性工学専攻)、情報学研究科(通信情報、知能情報、システム科学専攻) エネルギー科学研究科(エネルギー社会・環境科学、エネルギー基礎科学、エネルギー応用科学) 電気電子工学科

修了、卒業生数	修士	学部	進学・就職先
進学	6		京都大学博士課程工学研究科電気系
	4		京都大学博士課程情報学研究科
	1		京都大学博士課程エネルギー科学研究科
		52	京都大学修士課程工学研究科電気系
		40	京都大学修士課程情報学研究科
		9	京都大学修士課程エネルギー科学研究科
計	11	104	東京大学修士課程
官公庁等	2	1	特許庁、茨木市
電気関連	60	14	アジア電子工業、キーエンス、キャノン、三洋電機、三栄ハイテックス、シャープ、GE横河メディカルシステム、住友電工、ソニー、ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーション、デンソー、東芝、東海理化、NEC、NECシステムテクノロジー、日本テキサスインスツルメント、日本ビクター、パイオニア、日立製作所、日立電線、日立ビジネスソリューション、ファナック、富士通テン、古河電工、三菱電機、富士通、松下通信工業、松下電工、松下電産、メルコ、ルネサス・テクノロジー、ローム
通信	5	2	NTT、NTTコムウェア、NTTデータ、NTTドコモ、NTTドコモ関西
電力・ガス	13	1	関西電力、中国電力、中部電力、東京電力、大阪ガス
機械・自動車化学等	16	3	JFE、石川島播磨重工業、三菱重工、デンソー、トヨタ自動車、日本信号フジテック、ブリジストン、本田技研、三菱自動車、村田製作所、山武産業システム
鉄道		1	JR東日本
放送・新聞	2	1	東京放送、フジテレビ
金融・商社等	1	2	野村総合研究所、トーマツコンサルティング、ベンチャー・リンク
未定・研究生・帰国	5	3	
計	104	27	

### 22世紀からのメール(II) 佐々木隆雄(昭47年卒)

#### 会員寄稿

#### 7. LEAVE FOR 3000

20世紀末、環境問題に対する危機感の高まる折、地球温暖化防止に関する京都会議が開催され、各国のCO<sub>2</sub>排出削減目標が設定された。ところが21世紀になってこの目標値に従わないという国が出てきたり、その後も環境問題に関する各国による国際会議は目標の設定を巡って、いつもつまづいてきた。これはエネルギーや環境の問題を考えると、現在生きている私達と遠い将来の子孫のための利益について、どのようにウェイトを配分して考えればいいのかかわらないということがネックになっていたからなんだ。言い換えれば、いったい何年後の人達のことまで考えて目標を立てればいいのか、この目標設定が最大の難関だった。

それで京都会議から100年後に開かれた学生会議のほうは、この点にもっとも力を入れて意見が戦わされた。「人類400万年の歴史の過程で、地球滅亡の危機が襲ったことは一度もなかった。幾たびも戦争が繰り返されたが、将来の人達の生存権まで脅かそうと考えたりダーは一人もいかなかった」。「資源やエネルギーをみても、過去の人達はほとんど手つかずで私達に残してくれた。おかげで私達は、なみなみと豊かな生活をおくって

きた。しかし有史以来受け継がれてきた豊かな資源を、ここ200〜300年間に生きていく私達だけが、湯水のように使い尽していいはずはない」。議論は続いた。学生たちはそれぞれ自分たちの国で最も解決の急がれる問題を持ちよることにした。次の4点にほとんどの国の課題が集約された。

- ①食糧と水の問題、②環境問題（地球温暖化による海面上昇、ゴミ問題、異常気象問題、酸性雨問題）、③エネルギーおよび資源問題、④人の心の問題

それぞれの問題毎に議論を進めようとしたが、どうしても意見がかみ合わない。ある国は食糧問題の解決には、食糧の豊富な国から不足している国へ輸出すればいいという。輸出する余裕のあるあいだはそれでいい。ところが天候不順で世界的に凶作になったときや、人口が増えすぎて食糧の絶対量が足らなくなったらどうするか？そこで学生たちはこうした問題を検証するには、考える断面を明確にしておく必要があると考えた。議論は世界に公開生中継された。一つの案が日本の学生から出された。彼は日本古来の木造建築に強い関心を持つ学生だった。

「私達は、ただ単に今の時代に存在しているわけではありません。歴史の積み重ねの上に生きています。先達の知恵と苦勞が私たちの発展の基礎を築いてきたのです。だとすれば私達も将来の子孫のために残すべきものがあるはず。私は木

造建築の歴史を勉強しています。木は一見、短命に見えますが、実は地球上で一番寿命の長い生き物です。千年間は自身のために生き、伐採された後の千年間をさらに人のために、彼らは捧げます。

木の生命力を畏敬していた古都の宮大工たちは、たとえ自分たちの生命が失われても、手にかけてた建築物が永遠に残るよう精魂込めて普請しました。だから法隆寺金堂のように幾多の地震や戦乱に耐え、ミレニアムを生き抜いてきた木造建築物はいくつも残っています。木を地球とすれば私達一人一人が宮大工になるべきです。木が私達のためにその命を捧げてくれる期間、少なくとも1000年先までを見通して照準を定め、西暦3000年代の子孫のために、この豊かな地球を維持する目標を立てるべきだと私は思います。

「LEAVE FOR 3000」は是非これを私達の目標としようではありませんか」。

彼は木の壮絶な生きざまと、いにしへの宮大工たちの心意気に習いたいと提案したんだ。するとスウェーデン、ノルウェー等の北欧諸国が真っ先に賛成した。北欧の国々は古くから木に親しみ、木の文化を大事にしてきた国なんだ。もちろん他の国から1000年というのには長すぎるという意見も出た。しかし、大量消費の時代はすでに今世紀初めに終焉し、物から心へ、ポリウムからクオリティへ、ウォーからコミュニケーション

へと流れが変わっている。こうした時代にはぐくまれた学生たちは、すんなりこの目標を受け入れることができた。

こうして「LEAVE FOR 3000」、すなわち「西暦3000年代の人々が生きていけるよう、環境、資源、エネルギー、食糧を確保する道を追求しよう」が世界学生会議の結論になったんだ。この結果は世界にウェーブを巻き起した。これまでどうしても一本化できなかったのに、次代になう学生達が公開討論で決着をつけたものだから、この目標はあつというまに世界の国々のコンセンサスを得ることとなった。

8 環境とエネルギーの現状

「LEAVE FOR 3000」の目標をすぐに実行しなければならぬのが、環境とエネルギー問題だ。現在世界の人口は、一世紀前の60億人から100億人以上へと増加している。このためエネルギーの使用量も、省エネが進んだとはいえ5割以上増えている。

環境問題を象徴する地球温暖化については、CO<sub>2</sub>の排出抑制に世界中が結束して取り組んでいるが、地球の平均気温はこの1世紀で3度上がり、海面も50cm上昇した。このため南太平洋の小さな国々の土地が水没を始め、環境難民が出現している。天候不順や砂漠化などの影響で、食糧不足の影響が深刻になっている国もあり、広範囲な食糧危機到来の懸念が高まっている。

エネルギー資源も、石油はほと

んどなくなり、今ではごく限られた量がプラスチックをはじめとする石油化学製品の製造のみに使われている。天然ガスも石油からの需要シフトにより需給がひっ迫しており、燃料としての使用が制限されようとしている。石炭は多少余裕があるが、22世紀には天然ガスの動向によりその使用量の急増が懸念されることと、CO<sub>2</sub>の排出抑制のため、これも燃料としての使用を制限する方向で近々国際協議が始まる予定だ。

前世紀、循環型社会の形成のため「物を使い捨てる」ということをなくしたが、今世紀は「燃焼」という言葉がなくなるだろう。というより3000年代の地球を展望するとき「廃棄」と「燃焼」の両方を追放しなければ、逆に地球が消滅してしまふかもしれない。なぜなら燃焼はCO<sub>2</sub>の発生を伴うとともに、物づくりの原料として欠くことのできない石油、石炭、天然ガスなど化石燃料資源の命運が確実に尽きていくことにつながるからだ。

今では世界の電力の半分以上が化石燃料を消費せず、CO<sub>2</sub>を排出しない原子力発電所から供給され、残りが急速に縮小されつつある火力発電それに水力、風力、太陽光などの自然エネルギーから供給されている。

しかし原子力主体といっても、実は燃料100年ほど前からプルスール方式といって、ウラン燃料の再利用が行われるようになったので、なんとかウラン資源も延命し

ているが、そうはいっても今世紀前半には底をつくことになる。

そこで今、核融合炉の実用化に世界の人の関心が集中している。これは20世紀から資源小国日本がEUなどとともに、力を入れてきたものだ。海水に含まれる重水素の核融合反応からエネルギーを取り出そうというもので、原理は太陽など多くの恒星で起っている現象と同様のものだ。一時に発生するエネルギーが大きすぎてそのコントロールが難しく、実用化研究は20世紀半ばから始まり、足かけ3世紀という難事業となっている。だが、「LEAVE FOR 3000」の合言葉で、世界中の技術者達の支援もあり、実現まであと一歩のところまで来た。開発の先頭に立ってきたのは、欧米諸国よりさらにエネルギー資源のひっ迫している日本であり今ようやくその努力が実を結ぼうとしている。核融合炉が実用化されると、重水素は海水からほとんど無尽蔵に得られるので、「LEAVE FOR 3000」の目標のうち、エネルギーについては道すじをつけられることになる。同時に発電所にとつては、CO<sub>2</sub>を排出しない強力な援軍が加わることになり、地球温暖化問題の解決に向け大きく前進することができると期待されている。

これも軽水炉→プルスール→高速増殖炉→核融合炉と続いた、原子力発電の気の遠くなるような長い道程をしつかりと見据え、地道に研究開発を続けてきた、日本

を始めとする世界中の技術者達の努力のたまものだ。

9. 未来へのかけ橋

次のミレニアムにつなげてゆくには、まだまだ大きな課題がたくさん残っている。中国電力グループは、世界から見れば小さな小さな存在だが、私達は世界中の国々のベクトルを一本に重ね合わせることに少しでも貢献できるような、これからも努力を続けてゆくつもりだ。このことがたくさんの人達の連携を深めて多くの問題を解決し、1000年後の未来へのかけ橋になると信じている。

(完)

同窓会だより

昭和18年卒クラス会

昭和18年卒業生は毎年一泊二日のクラス会を開いている。平成14年には11月12・13の両日、京都で開催した。

初日は京都国際ホテルに集合、記念写真撮影後、懇親会に入った。掲載写真の示すとおり、出席者は婦人6名を含め、総勢17名であった。宴会では各個に近況報告を行ったが、余生の送り方に対する考え方がうかがえて興味深かった。食事後も話はずみ、なかなか終わりそうになかったので、喫茶室に席を移して談笑にふけた。

2日目は貸切バスでの観光が定例になっているが、全員80才を超える高齢者なので、集団で速やか

に移動するのが困難であることを考慮し、訪問先を少なくし、一ヶ所に充分時間をかけることにした。また、京都の地理には明るい人ばかりなので、目的地に着き、バスの発車時刻を告げた後には自由行動に入ることにした。かくして、2日目の朝食をホテルで終え、太秦映画村に向かった。映画村では、各人の興味の沸くままに、撮影に使用するセット、設備、器具などを自由に見学して廻った。また、映画文化館では、展示資料を見ることにより、若かりし往事を思い起こし、感慨深げな様子の方も多かった。



つぎに、法輪寺を参詣した。このお寺は京都では針供養と十三詣りの寺として親しまれているが、渡月橋を渡った高台にあり、美しく紅葉した山々を一望でき、実にすばらしかった。なお、当日は奉

納狂言を鑑賞できる予定であったが、時間の都合がつかず残念であった。法輪寺の境内には電電明神を祖神とする電電宮というちいさなお社があり、電気および電波の神として、関係者の信仰が厚いことので、このお社にもお詣りした。

前記の2社に参拝後に三三五五散策を楽しんだ。昼食は嵯峨野本店の湯豆腐だったが、食事の席では自由散策中の話に花が咲いた。さらに、午前中の行事が老体には少々きつかったせいもあってか、食後も尻が重く、容易に次の行動に移れなかった。ガイドさんの迎えにやつと腰を上げ、最後の目的地三十三間堂へ向かった。

三十三間堂には、ほとんどの者が訪れたことがあると思われるが、千手観音像を真中にして、左右五百体づつ、合わせて千体の千手観音立像が立ち並ぶ壮観な雰囲気感激を新たにされた様子であった。三十三間堂拝観後、京都駅九条口に至り、来年の卒業60周年記念クラス会における再会を約して解散した。

池上 淳一 (昭18年卒) 記

卒業55周年クラス会

平成14年10月3日、「リーガロイヤルホテル京都」で早めの夕食会を開いた。昭和22年9月卒業70名のうち生存され住所が判明している40名に案内状を出した結果、24名プラス夫人2名が参加され



た。前回の卒業50周年の集会では31名出席だった。寄る年波を感じながら久闊を叙し、次回もお互いに元気で再会したいものと思っ

た。出席者は写真の左から次のとおり。

- 「前列」岩崎英夫、小杉昇、立松治、高木俊宜、坂井利之、高月一、園山裕、平松道子、高月知子、
- 「中列」出口弘、山本孟、松本尚一、船越孝夫、村井寛治、木村清治、藤川清一、若林晴男、重永実、岡崎敬、平松幸雄、

「後列」大貫良三、外山敏夫、増田孝雄、信沢武一郎、樋田晃、池上文夫

高月 一 (昭22年卒) 記

電気電子昭和34年卒業同期会

電気電子昭和34年卒業生の卒業43周年同期会を平成14年9月7日(8日)に下諏訪温泉旅館「さん月」で開催した。会員70名中36名が出席した。3年前の卒業40周年記念会までは5年毎に京都と東京で交互に開催していたが、時間にゆとりのある年齢になり、今回から3年毎になった。

今回はアンケートの結果信州ということになり、鄙びた宿場町の下諏訪温泉になった。下諏訪は甲州街道が中山道に突きあたった由緒ある宿場町であり、諏訪大社、宿場の旧本陣の他、児湯や且過の湯といった由緒ある温泉に恵まれている。

7日午後、参加者は到着次第三々五々町の見学に出かけた。午後6時記念写真の撮影でもって宴が始まった。全員一言づつの近況報告をしたが、早朝3時半のウォーキング、など意欲的なものも多く、今後とも質の高い人生を楽しもうという気概に溢れていた。長尾総長からは工学部の桂キャンパスへの移転など大学の現状について報告頂いた。長尾さんが同期生であるのは何かと便利である。いつ果てるともされない宴を、いつもの通り琵琶湖就航歌で締めくく

った。

翌8日は、11人が塩嶺カントリークラブでのゴルフコンペ、22人がバスを仕立てての探勝会となった。

ゴルフ組は11人、一足早く朝食をとり、7時半バスにて出発。塩嶺カントリークラブはコース、クラブハウス共に地元の名門コースだけに申し分なかった。信州高原の大自然に包まれ、上田治設計の美しいコースである。老境に入つてのゴルフ故に幹事はブレイを優雅に楽しむ会と思ひコンペとはしなかつたが、これが不評で皆スコアを競いたかつたようだ。急遽、新ペリヤで順位を出すことになった。賞品も欲しかつた模様で、皆、まだまだ生々しい。

長尾さんの始球式で始まり、「ホウ」という感嘆と「ウワー」という悲鳴の交差するブレイが続いた。6インチリプレーは認められたが、OKなしと長尾さんの厳命。最後まで妥協を許さぬ競技の姿勢かパターに絶対の自信を持っておられたか。でも長尾さんも懇親会でキャディの力不足を嘆いておられたから、結構グリーンでは苦労された様子。

スコアと成績表は苦労した仲間と幹事の名譽のため、幹事特権で記録に残しません。でも、80台が2人いたことは記します。懇親会ではタッピー時間があつたので、地酒も酌み交わしながら全員挨拶。「賞品をもらつてないのに挨拶とは」と言いながら、皆怪気

炎であつた。お互いに元気を確かめあつた一日でした。探勝会は、旅館の女将の紹介による地元のシルバーボランティアの説明員付きの、諏訪大社秋宮、春宮、万治の石仏、御柱祭の木落し坂を巡る贅沢な観光になった。その後中山道を和田峠まで上がり、本州最南に位置する高層湿原である八島湿原を訪ね、日頃の鍛錬の成果を遺憾なく発揮して標準90分の周回コースを60分で回つた。

昼食は湿原のそばにある山小屋の高原荘でフランス料理と塩尻ワインを戴いた。オーナーシェフの高橋暁氏は南極越冬隊の Cock の経験がある。近年越冬隊の人気の低落しているなか、一本釣りの誘いに応じて来年の越冬隊に17年ぶりに参加することになった。現在は準備のため東京に在住しているが、特にこの日のために高原荘に帰つてこられた。食事の後、越冬の経験や苦労話に話の花が咲いた。

塩尻ワインでよい気分になつたところで再びバスに戻り、茅野にある銘酒眞澄の工場を通り過ぎ、諏訪大社本宮に回つた。社殿六棟は国の重要文化財、本殿はなく背後の山がご神体。車窓に諏訪湖が見えるようになる。と名残惜しい旅もいよいよ終わりに近づいた。バスはその後上諏訪駅、塩嶺カントリークラブ、塩尻と回り、三年後の桂キャンパスの見学も兼ねて京都での再

会を約しつつ流れ解散した。青木英人・川本幸雄(昭34年卒) **卒業40周年記念同窓会報告** 電気電子工学科昭和33年入学者ならびに昭和37年卒業者による、卒業40周年同窓会が平成14年11月1日、2日に亘つて実施されました。1日(金)には希望者によるゴルフ会が池田CCで行われ、翌2日(土)には大学電気電子教室の見学会と、夕刻から恩師の先生方をお招きしました懇親会が、祇園中村楼にて盛大に催され無事終えることができました。まず1日のゴルフ大会は直前になって参加者が若干減少したのですが、予定通り池田CCで実行致しました。名門池田CCは朝から濃霧が発生し、スタート時には視界が10メートル程にまでなり、キャディの方向指示に従つて、距離を確かめながらのプレーとなりましたが、さすがに手馴れたキャディのお嬢さん方からの確なアドバイスを得て、さしたる苦労も無くプレーを楽しむことができました。後半の午後からは快晴になつたのですが、スコアは前半の方が良かったという人も多く居り、霧はプレーには全く関係無いことが証明されました。遠路東京から参加された松尾氏、竹井氏はじめ全員が名門コースのゴルフを楽しみました。

者は37名、大学の教室の建物は私達が在学していた頃の赤レンガのアーチ門のみを残して、赤レンガの建物は全てコンクリート製の5階建にリプレースされておりました。松波先生のご尽力で、今は常時閉門している、普通いなれたアーチ門から教室に入構し、同先生から電気電子教室の近況と活躍状況を拝聴致しました。その概要は、  
・工学、情報学、エネルギー科学、それ以外の専攻で、昔の電気電子の仲間が広範囲に分散拡大し、多方面で活躍されていること、  
・平成14年度「21世紀COE (Center of excellence) プロダラム」に京大が11件採択され、うち電気電子・情報が2件を占める快挙を成したこと、  
・来年には先頭を切つて電気系、化学系が移転することになってい、桂キャンパスの概要など、OHPを使つての軽妙なご説明をいただきました。  
我々が京大で叩きこまれた工学は、物理的側面の重視による根源的な基礎理論重視だつたと思ひますが、そのお陰で社会に出た後も、単なるテクニクに終わらない、原理原則をベースにした思考であらゆる事象に対処してこられたものと思ひます。所謂京都学派というものが、電気電子工学の中にも未だ脈々と教室に流れている様を実感して、今後の教室のますますの発展を期して見学会を終えま

した。その後、見学会参加者全員から近況報告をお聞きしました。お蔭で全員母校の教壇に立つという減りに体験できない機会を得ることができました。最後に懐かしのアーチ門の前で記念写真に収まつて散会し、多くの方が旧市電通りの東山通りを祇園まで語り歩いて来られました。

した。その後、見学会参加者全員から近況報告をお聞きしました。お蔭で全員母校の教壇に立つという減りに体験できない機会を得ることができました。最後に懐かしのアーチ門の前で記念写真に収まつて散会し、多くの方が旧市電通りの東山通りを祇園まで語り歩いて来られました。



2日夕刻からの中村楼での懇親会は恩師、近藤文治先生、池上淳一先生、坂井利之先生、卯本重郎先生、西川禎一先生、木村磐根先生方のご参加を頂き、卒業生参加者は36名に及ぶ大懇親会となりました。

80歳を超えていらっしゃる先生もおられました。皆様益々お元気で未だ各方面で活躍されており、私ども先生方にはまだまだ負けられないぞ、という気力と生気を頂いた夕べとなりました。

学生時代には高嶺の花だった舞妓さん、芸妓さんも登場し、ある人には久しぶりの、また多くの卒業生には始めての古都の秋の夕べを、久しぶりの友人と語らいながら存分に楽しむことができました。

堀北 隆司(昭37年卒) 記

**本部だより**

**本部総会のお知らせ**

平成15年度本部総会は左記により開催されます。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時 平成15年5月25日(日)  
午後3時  
場所 東京目黒・八芳園  
なお当日は東京支部会員の皆様には別途ご案内があります。

**支部だより**

平成15年度各支部総会は次の日程で開催されます。

- 東京支部 5月25日(日)
  - 九州支部 5月9日(金)
  - 北海道支部 5月10日(土)
  - 中国支部 5月19日(月)
  - 四国支部 6月6日(金)
  - 関西支部 6月15日(日)
  - 北陸支部 6月21日(土)
  - 中部支部 6月28日(土)
- なお、詳しくは各支部幹事よりご案内があります。

**事務局だより**

**平成16・17年版名簿**

平成15年11月下旬に改訂版名簿を発行し、平成14・15年度に会費を納入された方には名簿をお送りいたします。

現名簿の記載事項に変更のある方は、名簿に綴込みの「はがき」または電話・ファックス・Eメール等にてお知らせください。

締め切りは8月5日となっております。  
(TEL) 075-701-3210  
(FAX) 075-701-1217  
E-mail: rakyu@sea.plala.or.jp

**平成14年度会費納入状況報告**

平成14年度が終了いたしましたので例年どおり、会費の納付状況についてご報告いたします。

平成15年2月末日現在の会員数は(A)は6675名で会費を納付された会員数は(B)は2673名でした。前年と比較すると163名の減少となりました。

納付率(B/A×100%)は40.0%で前年より3.4%低下し、納付率の推移を図1に示しますが漸減傾向です。

図2は卒業年度別納付状況ですが、納付パターンは毎年同じです。今後とも皆様のご理解とご協力をお願い致します。

事務局記

